

2021年度 東京大学バリアフリーシンポジウム

# 高等教育における「繋がる支援」 谷間のない支援を目指して



2022年  
**2月9日** (水)  
14:00 ~ 16:30

開催  
方法

オンライン配信  
(事前登録制)

主催

東京大学バリアフリー支援室



## 目次

挨拶「バリアフリーシンポジウムに寄せて」	2
<b>I. これまでの歩み</b>	<b>3</b>
東京大学バリアフリー支援室とは	4
<歴代役員・室長・支所長（副室長）>	5
<バリアフリー支援室略年表>	6
<バリアフリー支援室組織体制>	7
<b>II. シンポジウム資料</b>	<b>9</b>
プログラム	10
講演者等プロフィール	11
講演資料	12
<b>III. (付録) 資料</b>	<b>35</b>
学内広報コラム「バリアフリー最前線！」より	36
バリアフリー支援室所在地・連絡先	44



東京大学理事・副学長

林 香里

本日は、皆様ご多用の中、多数お集まりいただきありがとうございます。

東京大学バリアフリー支援室は、「東京大学憲章」の精神の下、平成16年に設置され、様々な試行錯誤を重ねながら、「バリアフリーの東京大学」を実現すべく歩んでまいりました。これもひとえに、学内外関係の皆様のご支援、ご助言があつてのことと、心から感謝申し上げます。

さて、本年度は、「高等教育における『繋がる支援』：谷間のない支援を目指して」というテーマを掲げて公開シンポジウムを開催いたします。

ちょうど、本学では、2021年9月30日に、藤井輝夫総長がUTokyo Compassを発表し、その中では、「対話から創造へ」「多様性と包摂性」「世界のだれもが来たくなるキャンパス」の3つを大学運営の基本理念として掲げております。このような理想を目指す東京大学では、障害の有無はもとより、多様な構成員の存在が本質的に重要な意味をもちます。

本シンポジウムでは、「STEM領域」「障害のある留学生」「相談支援」「大学等の連携」の4つのテーマを設定し、東京大学の障害学生支援における機会の平等への取り組みと課題を提示するとともに、より広い射程で、高等教育機関における支援とはどうあるべきかについての考察も試みます。

知の公共性のもっとも重要な担い手である大学として、高等教育機関における「バリアフリー支援」はどうあるべきか、活動の障害となる制度や施設の「谷間」はどこにあるのか、問題を提起し、これからのよりよい支援に向けて、話し合い、学び合う機会といたしたいと考えております。

ご参加くださった皆様にとって、有意義な時間となりますよう関係者一同、心を尽くして準備してまいりました。どうぞ、最後までご静聴ください。

東京大学バリアフリー支援室のシンポジウムにご参加いただきありがとうございます。

バリアフリー支援室は、学内有識者によるワーキンググループ等における1年間の議論を経て平成14年10月に設置された「バリアフリー支援準備室」の改組拡充により、平成16年4月に発足しました。東京大学で学ぶ学生、教職員からなる全構成員が、障害等を理由に不当な差別を受けることなく、その個性と能力を十全に発揮しうよう、主に環境側の改善を通じて全構成員の完全参加を実現すること、これが支援室の役割です。平成28年からは障害者差別解消法、改正障害者雇用促進法が施行され、国内外の法理に基づく体系的な環境整備と支援の実施が求められています。

さらに最近は、新しい課題にも直面しています。国際化が進む中、障害のある留学生や、海外からやってくる研究者も増えてきました。理学、工学、医学、生命科学など、実験や実習を伴う場面での合理的配慮には、未解決な部分も多く残されています。大学間のネットワーク構築や民間機関や自治体との連携もますます求められています。今回のシンポジウムでは、こうした新しい課題に対して、既存の社会資源やステークホルダーを繋げながら挑戦しようとする東京大学のバリアフリー支援の現状を紹介し、課題と展望を共有できればと思います。



東京大学  
バリアフリー支援室長  
熊谷 晋一郎

# I. これまでの歩み

東京大学バリアフリー支援室とは

<歴代役員・室長・支所長(副室長)>

<略年表>

<組織体制>

# 東京大学バリアフリー支援室とは

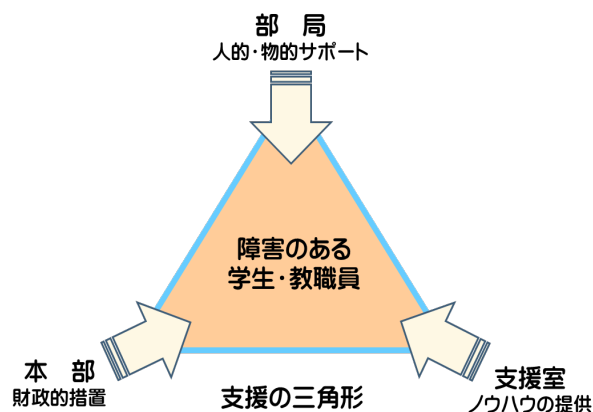
## 1. 沿革

東京大学バリアフリー支援室は、平成13年設置の「バリアフリーの東京大学」を実現するためのワーキンググループ等における議論を経て平成14年10月に設置された「バリアフリー支援準備室」の改組拡充により、平成16年4月に発足しました。

バリアフリー支援室は、発足当初駒場Ⅱキャンパスの先端科学技術研究センター内に置かれていましたが、支援の急速な拡充に対応するため、平成18年4月に本郷支所を開設、翌年平成19年4月には駒場支所を駒場Ⅰキャンパスへ移転しました。さらに、平成28年11月より柏キャンパスにて週一回本郷支所柏分室を開室しています。現在は本郷（柏）、駒場の2支所1分室体制で、東京大学に在籍する障害のある学生・教職員へのサポートおよびキャンパスのバリアフリー化に取り組んでいます。

## 2. 支援体制

バリアフリーの全学的推進のため、バリアフリー支援室および学内各部局は、「支援の三角形」の形成と強化に努めています。「支援の三角形」とは、原則として大学本部が財政措置を担い、バリアフリー支援室が専門的ノウハウの提供を担い、部局が人的・物的支援を担うという協力体制を指します。



## 3. 支援体制の特徴

本学の支援体制には、大きく3つの特徴があります。

1つは、障害のある学生と教職員の双方に支援を行っていることです。他大学ではあまり例をみない、本学独自の取組みといえます。

次いで、バリアフリー支援室運営の中核を担う室員の中に、障害のある当事者が複数名在籍し、自らの経験や知識を生かして有効的な支援を行っていることです。

最後に、「バリアフリー支援」という名称に重きを置く点です。「バリアフリー支援」という名称には、障害のある学生また教職員に対して、私たちの社会が築いているバリア（障壁）こそが問題であるという認識が背景にあります。今の社会で「障害者」とされている人たちに対して、私たちの社会は有形・無形の多くの障壁を築いてしまっています。そうした社会の障壁こそが問題であり、障害者個人に混在の本質があるのではないという基本的な認識に基づいて、「バリアフリー支援」という名称を用いています。

<歴代役員・室長・支所長（副室長）>

年度	担当役員	室長	本郷支所長	駒場支所長
2004 (H16)	渡邊 浩 (理事・副学長) ※兼務		加我 君孝 (医学系研究科教授) ※副室長	
2005 (H17)	濱田 純一 (理事・副学長) ※兼務			
2006 (H18)	佐藤 慎一 (理事・副学長) ※兼務			
2007 (H19)	平尾 公彦 (副学長) ※兼務			
2008 (H20)				
2009 (H21)	佐藤 慎一 (理事・副学長)	池田 信雄 (総合文化研究科教授)	松井 彰彦 (経済学研究科教授)	福島 智 (先端科学技術研究センター教授)
2010 (H22)	小島 憲道 (理事・副学長)			
2011 (H23)	武藤 芳照 (理事・副学長)		丹下 健 (農学生命科学研究科教授)	深代 千之 (総合文化研究科教授)
2012 (H24)		丹下 健 (農学生命科学研究科教授)	若原 恭 (情報基盤センター教授)	
2013 (H25)	長谷川 壽一 (理事・副学長)			中澤 公孝 (総合文化研究科教授)
2014 (H26)			西出 和彦 (工学系研究科教授)	
2015 (H27)	南風原 朝和 (理事・副学長)	深代 千之 (総合文化研究科教授)		
2016 (H28)				
2017 (H29)	松木 則夫 (理事・副学長)	熊谷 晋一郎 (先端科学技術研究センター准教授)		※2017.11~ 月脚 達彦 (総合文化研究科教授)
2018 (H30)				
2019 (R1)			金道 浩一 (物性研究所教授)	※~2019.10
2020 (R2)	(大学執行役・副学長)			松田 恭幸 (総合文化研究科教授)
2021 (R3)	林 香里 (理事・副学長)			

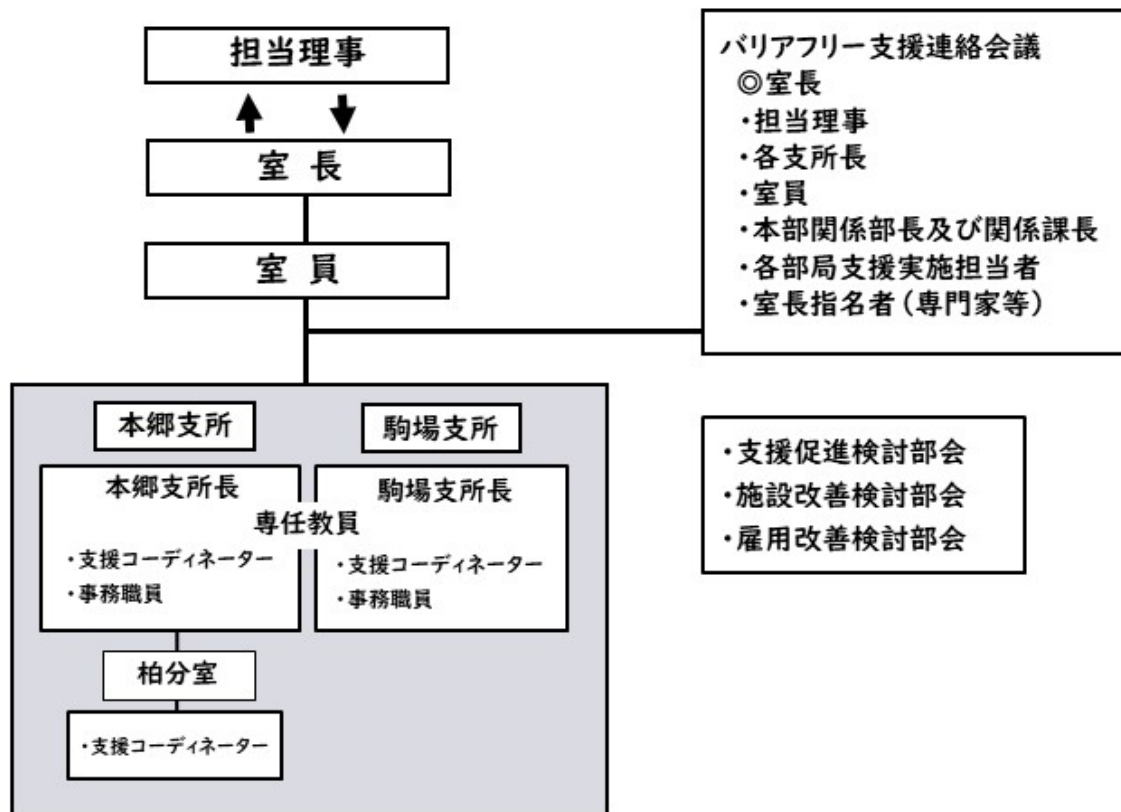
## <バリアフリー支援室略年表>

平成13年 6月	「バリアフリーの東京大学」を実現するためのワーキンググループ 設置
平成14年 6月 10月	東京大学バリアフリーワーキンググループ 設置 バリアフリー支援準備室 開室（駒場Ⅱキャンパス先端研3号館）
平成15年 3月 8月 9月	「東京大学憲章」 制定 「東京大学における障害をもった学生の修学の支援実施要項」 制定 第1回東京大学バリアフリーシンポジウム「高等教育とバリアフリー」 開催
平成16年 3月 4月 9月	東京大学バリアフリーワーキンググループ 解散 バリアフリー支援室 発足（バリアフリー支援準備室から改組） 「東京大学における障害をもった学生の修学の支援実施要項」 改正 「東京大学における障害をもった教職員の支援実施要項」 制定
平成17年 9月	第2回東京大学バリアフリーシンポジウム「東京大学のバリアフリー～現状と課題」 開催
平成18年 4月	バリアフリー支援室本郷支所 開設（理学部旧1号館）
平成19年 4月	バリアフリー支援室駒場支所 移転（駒場Ⅰキャンパス教養学部8号館）
平成20年11月	バリアフリー支援室新体制ワーキング 設置
平成21年 3月	バリアフリー支援室新体制ワーキング 解散 「東京大学バリアフリー支援室規則」 制定
平成21年 4月 12月	専任の室長と本郷・駒場両支所長を置くバリアフリー支援室新体制の発足 「東京大学における障害のある学生の修学の支援実施要項」 改正 「東京大学における障害のある教職員の支援実施要項」 改正
平成22年 4月 平成22年 6月 平成22年12月	「東京大学バリアフリー支援室規則」 改正 バリアフリー支援室本郷支所 移転（学生支援センター内） 第3回東京大学バリアフリーシンポジウム「バリアフリーの未来を拓く～東京大学におけるバリアフリー支援とバリアフリー雇用 その現状と展望～」 開催
平成24年 3月	第4回東京大学バリアフリーシンポジウム「大学の防災とバリアフリー」 開催
平成25年 4月	「東京大学におけるバリアフリーの推進に関する指針」 制定 「東京大学における障害のある学生の修学の支援実施要項」 廃止 「東京大学における障害のある教職員の支援実施要項」 廃止 「東京大学バリアフリー支援室における障害のある学生及び教職員の支援実施要項」 制定
平成26年11月	第5回東京大学バリアフリーシンポジウム「高等教育機関における機会均等への挑戦－『バリアフリーの東京大学』は実現したか－」 開催
平成27年 7月	「障害者差別解消法に向けた対応検討会議」 設置

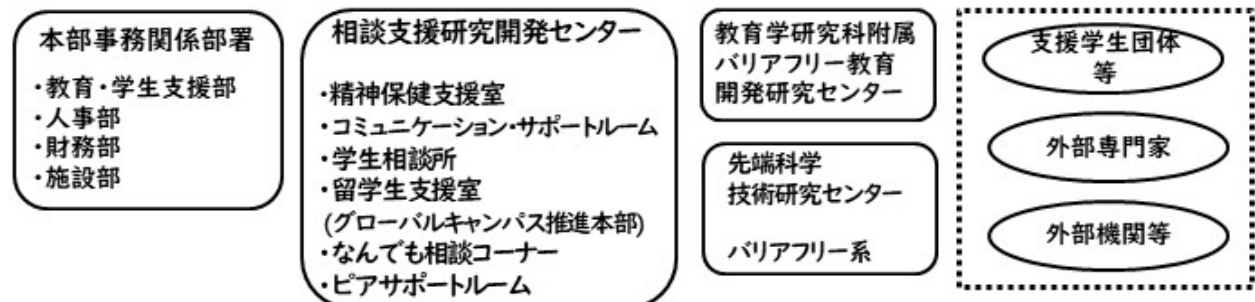


平成28年 3月	「障害者差別解消法に向けた対応検討会議」 解散 「東京大学における障害を理由とする差別の解消に関する対応要領」 制定 「東京大学における障害を理由とする差別の解消に関する対応要領に係る留意事項」 制定 「東京大学障害者差別事案解決委員会」 設置 「東京大学障害者差別事案解決委員会規則」 制定
平成28年11月	バリアフリー支援室本郷支所柏分室 開設（柏キャンパス新領域基盤棟※週1回）
平成30年11月	第6回東京大学バリアフリーシンポジウム「東京大学バリアフリー支援室15年の歩みと今後の課題ーインクルーシブ社会における包括的支援×大学ー」 開催
12月	「東京大学におけるバリアフリーの推進に関する指針」 改正 「東京大学バリアフリー支援室規則」 改正

### <バリアフリー支援室組織体制>



### 連携・協力機関





memo



## Ⅱ. シンポジウム資料

プログラム

講演者等プロフィール

講演資料

# プログラム

全体司会：松本 光弘 本部学生支援課長

14：00 開会 開会挨拶 林 香里 バリアフリー担当理事・副学長

14：05-14：15 東京大学バリアフリー支援室概要  
切原 賢治 バリアフリー支援室准教授

## 第一部 「繋がる支援」の現状と課題

14：15-14：30 趣旨説明  
熊谷 晋一郎 バリアフリー支援室長／先端科学技術研究センター准教授

14：30-14：45 STEM 領域での支援  
並木 重宏 先端科学技術研究センター准教授

14：45-15：00 障害のある留学生への支援  
大西 晶子 相談支援研究開発センター／グローバルキャンパス推進本部准教授

15：00-15：15 合理的配慮提供を支える支援  
川瀬 英理 相談支援研究開発センター助教

15：15-15：30 全国大学等の連携とプラットフォーム形成  
近藤 武夫 先端科学技術研究センター准教授

15：30-15：45

休 憩

## 第二部 「繋がる支援」の未来を展望する

15：45-16：25 パネルディスカッション  
ファシリテーター：熊谷 晋一郎  
パネリスト：大西 晶子、川瀬 英理、近藤 武夫、並木 重宏（敬称略・五十音順）

16：25 閉会挨拶 熊谷 晋一郎 バリアフリー支援室長

16：30 閉会

## 講演者等プロフィール

---

### 切原 賢治（きりはら けんじ）

東京大学バリアフリー支援室准教授。精神科医。東京大学医学部附属病院精神神経科などで臨床研修を行った。東京大学大学院医学系研究科博士課程を修了した後、カリフォルニア大学サンディエゴ校に留学。主に精神疾患の脳波研究に従事した。2012年4月から東京大学医学部附属病院精神神経科で臨床、研究、教育に従事した。2020年7月より現職。

### 熊谷 晋一郎（くまがや しんいちろう）

東京大学先端科学技術研究センター准教授、小児科医、東京大学バリアフリー支援室長、日本学術会議連携会員、内閣府障害者政策委員会委員。新生児仮死の後遺症で、脳性マヒに。以後車いす生活となる。東京大学医学部医学科卒業後、複数の病院での勤務、東京大学大学院医学系研究科博士課程での研究生活を経て、現職。専門は小児科学、当事者研究。

### 並木 重宏（なみき しげひろ）

東京大学先端科学技術研究センター准教授。2009年筑波大学大学院生命環境科学研究科博士課程修了、博士（理学）。米国ハワード・ヒューズ医学研究所博士研究員、同リサーチサイエンティストを経て、同コンサルタントを現在も務める。2015年6月から12月まで病氣療養のため研究を中断。2009年に先端研特任助教に着任後、特任講師、特任准教授を経て、2020年4月から現職。

### 大西 晶子（おおにし あきこ）

東京大学相談支援研究開発センター／グローバルキャンパス推進本部留学生支援室准教授。博士（教育学）／臨床心理士・公認心理師。2006年5月より、東京大学で留学生・外国人研究者等の相談・支援に関わる。アクセスのしやすい学生支援サービスに関心を持ち、利用する学生の視点に立った留学生支援を心掛けている。

### 川瀬 英理（かわせ えり）

東京大学相談支援研究開発センター助教、公認心理師、臨床心理士。医療機関での臨床活動を経て、2010年東京大学内における発達障害学生やその傾向のある学生を対象とした相談室コミュニケーション・サポートルーム開室から、10年以上、発達障害のある学生に関する修学、就労支援、メンタルケアやその学生にかかわる保護者、教職員等との連携、共同を実践している。専門分野；臨床心理学、認知行動療法

### 近藤 武夫（こんどう たけお）

東京大学先端科学技術研究センター准教授。博士（心理学）。専門は特別支援教育（支援技術）。広島大学教育学研究科助教、米国ワシントン大学計算機科学・工学部／DO-IT Center 客員研究員を経て現職。多様な障害のある人々を対象に、教育や雇用場面での支援に役立つテクノロジー活用や合理的配慮、修学・雇用制度のあり方に関する研究を行っている。

2022.2.9 東京大学バリアフリーシンポジウム

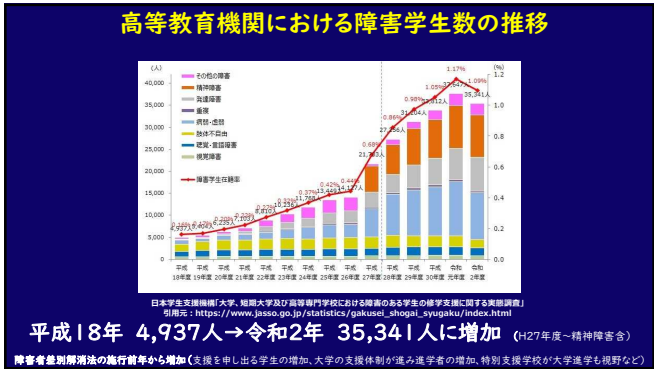
# 東京大学バリアフリー支援室概要

東京大学バリアフリー支援室  
切原 賢治

1

# 1. 障害者差別解消法と東京大学憲章

2



3



4

## 障害者差別解消法における用語の定義

- 対象となる「障害者」とは?**  
身体障害、知的障害、精神障害(発達障害を含む。)その他の心身の機能の障害(以下「障害」と総称する。)がある者であつて、**障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるもの**をいう。  
=> 障害者手帳所持の有無には関わらない。
- 社会的障壁とは?**  
機能障害のある人の社会参加を阻む、周囲の態度や環境による障壁(機能障害のある人も、平等に参加することを想定して作られていない)

5

## 障害者差別解消法:差別を解消するための措置

- 不当な差別的取扱いの禁止**  
✓教職員は、教育・研究その他、本学が行う事務又は事業において、障害者に対して、不当な差別的取扱いをしてはならない。
- 合理的配慮の提供**  
✓教職員は、教育・研究その他、本学が行う事務又は事業において、障害者から配慮を必要としている旨の意思の表明があった場合、合理的配慮を提供しなければならない。

6

### 合理的配慮の考え方:三要件

#### (1) 特定の場合における必要性

特定の障害及び特定の状況により支障が生じており、特定の配慮により支障の改善が想定される。

#### (2) 公正な機会均等のための適当性

配慮に当たって、教育・研究その他本学が行う事務又は事業の本質を変更しない。

#### (3) 非過重な負担

配慮に当たって、物理的・技術的負担、人的・体制上の負担及び費用負担の程度が、本学の事務又は事業の規模及び財政・財務状況を踏まえて妥当である。

教職員は、配慮が合理的ではないと判断した時は、障害者にその理由を説明し、代替手段を提示しながら理解を得るよう努めることが望ましい。

7

### 東京大学憲章

#### 17 (教育・研究環境の整備)

東京大学は、教育・研究活動の発展と変化に柔軟に対応しつつ、常に全学的な視点から、教育・研究活動を促進し、構成員の福利を充実するために、各キャンパスの土地利用と施設整備を図る。また、心身の健康支援、バリアフリーのための人的・物的支援、安全・衛生の確保、ならびに環境および景観の保全など、構成員のために教育・研究環境の整備を行うとともに、地域社会の一員としての守るべき責務を果たす。

東京大学では、障害者差別解消法(2016)と、東京大学憲章(2003)の理念のもと障害学生・教職員支援を行っています。

8

## 2. 東京大学における支援

9

### 東京大学バリアフリー支援室の沿革と概要

#### 【沿革】

- 2002年10月 バリアフリー支援準備室開設
- 2004年 4月 バリアフリー支援室開設(駒場Ⅱキャンパス)
- 2006年 4月 バリアフリー支援室本郷支所開設(本郷キャンパス)
- 2007年 4月 駒場支所移転(駒場Ⅰキャンパス)
- 2016年11月 本郷支所柏分室開設(柏地区キャンパス)

【スタッフ】 10名(専任教員2名、支援コーディネーター4名、事務職員4名)

#### 【支援室員】

室長: 熊谷 晋一郎(先端科学技術研究センター准教授)  
その他教職員(学内有識者、関係部課長等) 含め、計30数名で構成

室の運営の中核を担う室員に、障害当事者が複数名在籍していることが、東京大学の支援の大きな特徴です。

10

### 東京大学におけるバリアフリー支援体制について

#### バリアフリー支援室の支援体制



- 各部局に配置されている支援実施担当者が、支援の窓口となります
- バリアフリー支援室には専門知識を持つスタッフが常駐し、障害のある学生・教職員や、支援実施担当者の相談に応じます
- また、バリアフリーに関する全学的な理解、啓発も進めています。

11

### バリアフリー支援室の活動(1)

#### ●障害のある学生・教職員への支援のコーディネート

障害のある学生・教職員が所属する学部・研究科等の担当者と共に個々の支援ニーズの把握に努め、支援ノウハウの提供を行います。

#### ●サポートスタッフの募集・養成講座・スキルアップ研修の実施

授業や学生生活の様々な場面で障害のある学生を支援する“学生サポートスタッフ”を随時募集し、支援に必要な各種スキルを身につけるための講座・研修を行っています。

#### ●「バリアフリー支援連絡会議」「バリアフリー支援研修会」

#### 「学生とのバリアフリー意見交換会」「障害のある教職員との意見交換会」等の開催

バリアフリーに関する各種会議や教職員向けの研修を主催する他、毎年室員が障害のある学生・教職員から直接意見を聞く意見交換会等を開催しています。

12

## バリアフリー支援室の活動(2)

### ●バリアフリーに関する啓発

昼休みに手話で交流する「手話でしゃべランチ」やバリアフリー講習会などを開催し、バリアフリーに関する啓発を進めています。

### ●支援機器の貸出

必要に応じ、各種支援機器の貸出を行います。

### ●施設のバリアフリーチェック

学内のバリアフリー状況を調査し、関係者と協議して改善をします。

平成24年度からは、学内に在籍する障害のある学生・教職員やサポートスタッフの協力も得ながら本郷地区・駒場地区・柏地区・白金台のキャンパス内を調査し、本学を利用するすべての人が安心してキャンパス内を移動できるような「バリアフリーマップ」の作成に取り組んでいます。

13

## 障害のある学生への支援例

### 【共通の支援例】

- ・支援に関する相談
- ・授業担当教員との連絡・調整
- ・定期試験時に配慮すべき事項の調整
- ・進学先部局との引継面談
- ・支援機器に関する情報提供、支援機器の貸出
- ・学内施設の改善、学生宿舎のバリアフリー化への対応

14

## 障害のある学生への支援例

### 【視覚障害のある学生】

- ・教科書や資料の電子データ化（音声読み上げ）や文字拡大
- ・代筆、代読

### 【聴覚障害のある学生】

- ・パソコンテイク、ノートテイク
- ・映像教材の字幕挿入
- ・補聴援助システムの貸出

### 【肢体不自由のある学生】

- ・教室アクセスの確保
- ・ノート作成・代筆
- ・教科書や資料の電子データ化

### 【内部障害・慢性疾患のある学生】

- ・実技のない身体運動科目の履修
- ・専用駐車場の確保
- ・優先席の設置

### 【発達障害のある学生】

- ・視覚または聴覚提示の調整
- ・教示方法の調整
- ・コミュニケーションの補助

### 【精神障害のある学生】

- ・授業時の退室、再入室の許可
- ・情報保障
- ・身体機能の障害に準じた配慮

15

## バリアフリー支援室所在地・連絡先

### 【本郷支所】 (本郷キャンパス)



学生支援センターモジュール  
(御殿下記念館北側)  
電話:03-5841-1715  
FAX:03-5841-1717

### 【駒場支所】 (駒場 I キャンパス)



教養学部8号館111号室  
電話:03-5465-8944  
FAX:03-5465-8952

### 【本郷支所柏分室】 (柏地区キャンパス)



新領域基盤棟2階2B5号室  
電話:04-7136-5574

支援室URL <http://ds.adm.u-tokyo.ac.jp/>

16



2021年度東京大学バリアフリーシンポジウム  
高等教育における「繋がる支援」谷間のない支援を目指して

## 第一部「繋がる支援」の現状と課題

### 趣旨説明

熊谷 晋一郎  
東京大学バリアフリー支援室

1

### 大学のバリアフリーにおける課題のいくつか

- 理学、工学、生命科学、医学など、実験や実習の場面で生じるニーズ（置き去りにされやすい専門分野）
- 障害のある留学生や、海外からやってくる研究者のニーズ（制度・文化の移行過程に生じる谷間）
- 支援に先立って「自分は何者なのか」を知りたいというニーズ（見えにくい困難に関する認識的不正義）
- 初等中等教育・大学・自治体・企業の谷間に落ちやすいニーズ（大学進学、キャンパス内生活支援、就職）

2

### 大学のバリアフリーにおける課題のいくつか

- 理学、工学、生命科学、医学など、実験や実習の場面で生じるニーズ（置き去りにされやすい専門分野）
- 障害のある留学生や、海外からやってくる研究者のニーズ（制度・文化の移行過程に生じる谷間）
- 支援に先立って「自分は何者なのか」を知りたいというニーズ（見えにくい困難に関する認識的不正義）
- 初等中等教育・大学・自治体・企業の谷間に落ちやすいニーズ（大学進学、キャンパス内生活支援、就職）

3



手術室での新生児処置



心臓超音波検査



外来診察



乳児採血



救急搬送



病棟管理

4

Accessibility, Inclusion, and Action in Medical Education: Lived Experiences of Learners and Physicians With Disabilities

### 障壁と参加促進因子

障壁	参加促進因子
<b>構造的要因</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 情報に詳しい障害支援部門</li> <li>・ 明確な方針と手順の欠如</li> <li>・ 微妙な臨床上の配慮や支援技術に関する知識へのアクセスの欠如</li> <li>・ その他の意味のある配慮提供へのアクセスの欠如</li> <li>・ テクニカルスタンダードの周知徹底と配慮へのアクセスに関する情報提供の失敗</li> <li>・ 医療現場における最新の技術やその他の発展を反映していないテクニカルスタンダード</li> <li>・ 健康管理およびウェルネスサポートへのアクセスの欠如</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 適切な配慮へのアクセス</li> <li>・ 配慮へのアクセスのしやすさ</li> <li>・ 臨床上の配慮や医学教育に関する知識をもつ障害支援部門</li> <li>・ 人的ネットワークや学生団体</li> </ul>
<b>文化と風土</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ステレオタイプとスティグマ</li> <li>・ 「臨床化された」文化</li> <li>・ 同僚の否定的な態度</li> <li>・ 障害への固定観念により、学習者が専門分野から外される</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 障害者に開かれた入試制度</li> <li>・ ビアサポートネットワークと医師のメンター</li> <li>・ ダイバーシティに対するトップダウンのコミットメント</li> </ul>

5

### 大学のバリアフリーにおける課題のいくつか

- 理学、工学、生命科学、医学など、実験や実習の場面で生じるニーズ（置き去りにされやすい専門分野）
- 障害のある留学生や、海外からやってくる研究者のニーズ（制度・文化の移行過程に生じる谷間）
- 支援に先立って「自分は何者なのか」を知りたいというニーズ（見えにくい困難に関する認識的不正義）
- 初等中等教育・大学・自治体・企業の谷間に落ちやすいニーズ（大学進学、キャンパス内生活支援、就職）

6

### 障害のある留学生が直面する困難の一部

- アクセシブルな住居の確保
- 外国語による情報保障
- 医療・福祉サービスの利用
- ニーズアセスメントの方法や、利用できるサービスの国による差

...

7

### 大学のバリアフリーにおける課題のいくつか

- 理学、工学、生命科学、医学など、実験や実習の場面で生じるニーズ（置き去りにされやすい専門分野）
- 障害のある留学生や、海外からやってくる研究者のニーズ（制度・文化の移行過程に生じる谷間）
- 支援に先立って「自分は何者なのか」を知りたいというニーズ（見えにくい困難に関する認識的不正義）
- 初等中等教育・大学・自治体・企業の谷間に落ちやすいニーズ（大学進学、キャンパス内生活支援、就職）

8

### 共有されにくい困り事 （相談支援の重要性）

1. めずらしい困り事
2. それを表現する語彙が流通していない困り事
3. 優先順位が低くされがちな困り事
4. 打ち明けると疑われたり誤解されやすい困り事
5. 規範によって恥ずかしいとされやすい困り事

9

### 大学のバリアフリーにおける課題のいくつか

- 理学、工学、生命科学、医学など、実験や実習の場面で生じるニーズ（置き去りにされやすい専門分野）
- 障害のある留学生や、海外からやってくる研究者のニーズ（制度・文化の移行過程に生じる谷間）
- 支援に先立って「自分は何者なのか」を知りたいというニーズ（見えにくい困難に関する認識的不正義）
- 初等中等教育・大学・自治体・企業の谷間に落ちやすいニーズ（大学進学、キャンパス内生活支援、就職）

10

### 24時間介助を必要とする障害学生・研究者の支援

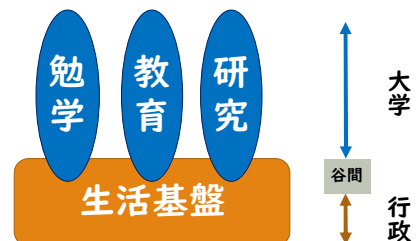
重度訪問介護の適用範囲は「居宅における入浴、排せつ又は食事の介護等及び外出（通勤、営業活動等の経済活動に係る外出、通年かつ長期にわたる外出及び社会通念上適当でない外出を除く。以下この第2、第3及び第4において同じ。）」

『障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害福祉サービス等及び基準該当障害福祉サービスに要する費用の額の算定に関する基準』厚生労働省告示第523号（2006年1月29日）

「生活者として independent でなければ、高等教育や経済活動に従事できない」という前提に基づく制度設計

11

生活基盤の部分で支援が必要な人が、同時に生産活動に従事するという前提がないと、支援の谷間が生まれる



12

**バリアフリー支援室と連携させていただいている  
先生方のご講演**

□理学、工学、生命科学、医学など、実験や実習の場面で生じるニーズ（並木先生のご講演）

□障害のある留学生や、海外からやってくる研究者のニーズ（大西先生のご講演）

□支援に先立って「自分は何者なのか」を知りたいというニーズ（川瀬先生のご講演）

□初等中等教育・大学・自治体・企業の谷間に落ちやすいニーズ（近藤先生のご講演）

東京大学バリアフリーシンポジウム  
高等教育における「繋がる支援」 谷間の無い支援を目指して  
2022年2月9日(水) 14:00-16:30

## STEM領域での支援

並木 重宏  
東京大学・先端科学技術研究センター  
namiki@rcast.u-tokyo.ac.jp

1

## 本日の内容

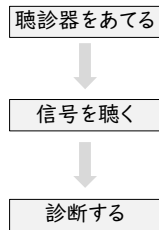
1. 実験室での合理的配慮
2. 先端研の取り組み

2

### 聴診の手順



聴診器

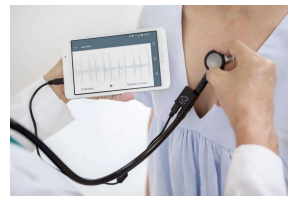


www.storyblocks.com

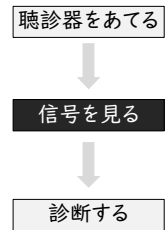
3

### 聴診:支援技術の利用

聴覚に障害があるとき



電子聴診器

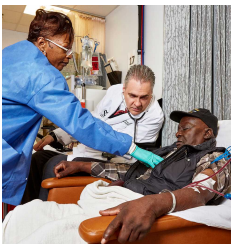


www.medicalexpo.com

4

### 聴診:支援者の利用

上肢に障害があるとき

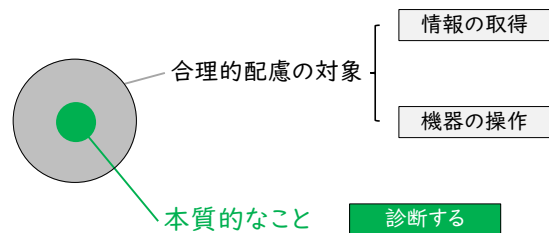


Jim Post氏 退役軍人医療センター; Gilmer (2019) The magazine for active wheelchair users



5

### 職務の内容



6

## 科学者の本質は？

『視覚や運動機能に障害をもつ学生は、「物理的に」実験を行う必要はないが、実験の精確な計測をアシスタントに指示できる技術的・科学的な知識をもっている必要がある。本質的なことは、実験を行うことではなく、知識やスキル、実験を観察するための指示を行うことである』

Sukhai et al. (2014) Ontario's Universities Accessible Campus (カナダオンタリオ大学協議会)

7

## 実験室での支援

### 合理的配慮

- 物品の移動
- 作業を代わりに行うこと
- 実験データの記録

### 本質的なこと

- 実験のデザイン
- 実験データの解釈
- トラブルシューティング

Roberts, B. (2013). A lifeline for disability accommodation planning: how models of disability and human rights principles inform accommodation and accessibility planning (Queen's University, Doctoral dissertation)

8

## Geerat Vermeij (視覚障害・進化生物学)

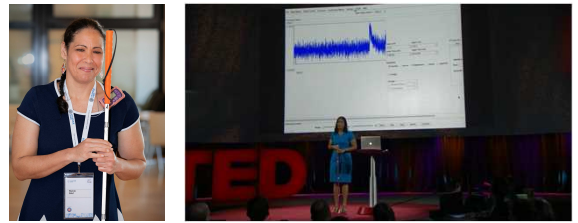


フィールドワークでは支援者、白杖  
助手が論文音読、点字メモ作成

Mississippi State Univ (2020) "Meet Geerat J. Vermeij - Paleobiologist"

9

## Wamda Díaz-Merced (視覚障害・天体物理学)



20代で失明、信号を音に変換する可聴化技術を使い研究を継続

International Astronomical Union; Díaz Merced (2016) TED

10

## 本日の内容

1. 実験室での合理的配慮
2. 先端研の取り組み

11

## 病気・障害のある科学者の調査

### 障害

肢体不自由/視覚障害/聴覚障害/発達障害/精神障害

### 病気

リウマチ/ライム病/全身性エリスマトーデス/多発性硬化症/筋ジストロフィー/ジストニア/ALS/SMA/筋痛性脳脊髄炎/線維筋痛症/エラスターノス症候群/脳性まひ/脊髄損傷/慢性疼痛/ポリオ/網膜色素変性症

「インクルーシブ・アカデミア」 <https://idl.tk.rcast.u-tokyo.ac.jp/>



12



13



14

まとめ

実験室の合理的配慮

支援技術: 方法を変えればできることがある  
 支援者: できないことは手伝ってもらおう

障害があっても科学に参加することができる

15

以下 参考資料

16

合理的配慮の事例

17

**視覚障害**

全盲学生が理学部を修了した事例(国際基督教大学)  
 補助役: 支援学校の教員, ヘルパー: 上級生, 点字  
 オプタコン (光⇒振動)

感光器 (光⇒音)

国際基督教大学教養学部理学科「盲学生のためのプロジェクトチーム」編(1986)「明日への大学」続編, ICU  
 における一盲学生の物理実験・化学実験履修の記録; 柳家未来(2019) 手で見えないのち: ある不思議な授業の  
 力. 岩波書店; 特別支援教育 教材 指導法データベース.

18



19



20



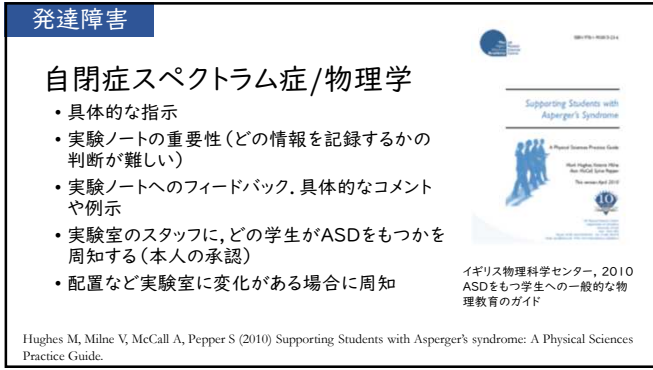
21



22




23



24

**バーチャル実験室 (Virtual lab)**

バーチャルリアリティによる  
実験室の再現



- 操作**  
基本的にクリックのみ
- 低コスト**  
実験ごとに10ドル, 199ドルでフルアクセス
- ゲーミフィケーション**  
現場の再現 (犯罪捜査)
- 危険性が無い**  
失敗できる
- 学習効果**  
理解度は、リアルな実験室と変わらない (De Jong et al. 2013)

De Jong, T., Linn, M. C., & Zacharia, Z. C. (2013). Physical and virtual laboratories in science and engineering education. *Science*, 340(6130), 305-308.

25

**まとめ**

障害があっても科学に参加することができる

参加のポイント

支援技術: 方法を変えればできることがある  
支援者: できないことは手伝ってもらう

26

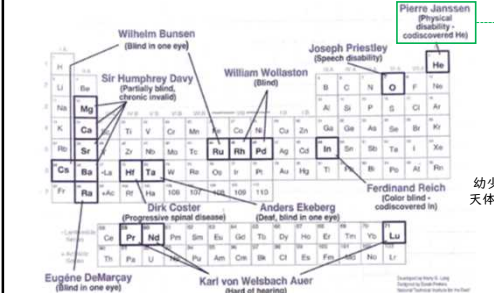
**障害のあるノーベル賞受賞者**

<p><b>Dorothy Hodgkin</b></p> <p>車椅子、膠原病</p> <p>イギリス 1964年化学賞 「X線回折による生体分子の構造決定」</p>	<p><b>Charles Jules Henri Nicolle</b></p> <p>ろう (聴覚障害)</p> <p>フランス 1928年生理学医学賞 「発疹チフスに関する研究」</p>
<p><b>James Sumner</b></p> <p>片手の欠損 (利き手)</p> <p>アメリカ 1946年化学賞 「酵素の結晶化」</p>	<p><b>John Forbes Nash, Jr.</b></p> <p>統合失調症</p> <p>アメリカ 1994年経済学賞 「非協力ゲームの理論における均衡の先駆的な分析」</p>
<p><b>Carolyn Widney Greider</b></p> <p>ディスレクシア (失読症)</p> <p>アメリカ 2009年生理学医学賞 「テロメア・テロメラーゼによる染色体保護」</p>	

nobelprize.org

27

**元素の発見**



Pierre Janssen (1824-1907)  
幼少期に事故で歩けなくなる  
天体観測のため世界中を航海


Paganò, T., & Ross, A. D. (2015). *Teaching Chemistry to Students with Disabilities: A Manual for High Schools, Colleges, and Graduate Programs*.

28

**病気・障害のある科学者の調査**

**障害**  
肢体不自由/視覚障害/聴覚障害/発達障害/精神障害

**病気**  
リウマチ/ライム病/全身性エリストデス/多発性硬化症/筋ジストロフィー/ジストニア/ALS/SMA/筋痛性脳脊髄炎/線維筋痛症/エラスターノス症候群/脳性まひ/脊髄損傷/慢性疼痛/ポリオ/網膜色素変性



「インクルーシブ・アカデミア」 <https://idl.tk.rcast.u-tokyo.ac.jp/>

29



2021年度東京大学バリアフリーシンポジウム  
高等教育における「繋がる」支援—谷間のない支援を目指して

## 障害のある留学生への支援

大西晶子  
(相談支援研究開発センター  
グローバルキャンパス推進本部)

1

## 日本で学ぶ留学生

2019年度の留学生数は、312,214人  
(2020年・2021年度は新型コロナウイルス感染症の影響)

日本の留学生の9割以上は「アジア」出身

東京大学の場合  
・大学院生、アジア出身者が9割弱  
・学修・研究を英語で行う学生が多い  
・交換留学生・ダブルディグリープログラム等、所属機関を海外にも持つ学生も近年増加  
・海外在住のままオンラインで学ぶ学生への対応は新たな課題

日本学生支援機構 2019 (令和元)年度外国人留学生の在籍状況調査結果  
https://www.studyin-japan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/index.html

2

## 障害者の権利とは？合理的配慮とは？

**障害者の権利に関する条約**

- ・国連の条約 (日本は2014年に批准)
- ・国内法の有無、内容、範囲等
- ・「合理的配慮」概念

国・地域によって様ではない

批准国一覧  
[https://www.mofa.go.jp/mofaj/fg/hr\\_ha/page22\\_002110.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/fg/hr_ha/page22_002110.html)  
各国法 参考)  
公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会  
国内外の障害者差別禁止法・条例・手話言語条例  
[https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/law/anti/index\\_overseas.html](https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/law/anti/index_overseas.html)

3

## システムを超えて移動を行う障害を持つ留学生の支援

- ・「高大」「学部から院」「社会」への接続など、支援の継続性の課題
- ・留学前の居住国で、支援を受けていない学生は、留学後の支援の「開始」と卒業後の「継続」が課題

4

## 支援において生じる具体的な留意点

**来日前の経験の相違や留学形態の相違によって**

- ・ 入学時点で学生に関して得られる情報の格差
- ・ 本人・周囲の障害特性/権利・受けられる支援等に関する理解度に格差
- ・ 援助要請・配慮要請の行動に影響
- ・ 可視的ではない障害は、特に差が生じやすい(例、発達障害)

**大学の支援の位置づけと留学生のニーズ**

- ・ 到着初日から必要な生活面の支援への対応
- ・ 福祉サービスを活用するための支援が必要
- ・ ことばの問題
- ・ サポートシステムの短期間での再構築の困難さ

**日本の大学と本人(本人のホーム大学)の認識・期待の差**

5

## ポイント: 学生を取り巻くサポートシステムをつなぐ

・特に交換留学生は、谷間の問題が見えやすい  
・家族等の力を得られない留学生には、仕組みとしてのサポートが必須

来日前の居住国におけるサポートシステム

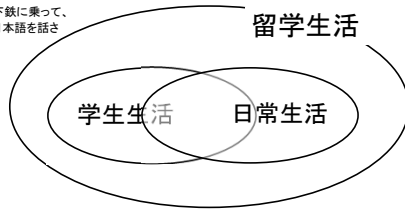
日本の大学の受け入れ担当者

日本におけるサポートシステムの構築

6

## ポイント: 取り組み: 学修の場と生活の場をつなぐ

例. 大学寮に住み、地下鉄に乗って、  
大学に通う車椅子の(日本語を話さ  
ない)留学生



・福祉サービスは、住民登録をした人が対象  
・半年しか日本に滞在しない人、日本語の読解力を有さない人、知人等の社会的援助資源を有さない人を、想定していない →大学は？

7

## ポイント: 交差する領域のニーズへの対応

- ・「学生の属性」「カテゴリー」で学生サービスを分類すると、交差する領域の支援の拡充は困難
- ・「所掌」や「コンプライアンス」起点で考えると、「障害を持つ」「留学生」の支援ニーズの多くは谷間に落ち込む
- ・連携・協働による支援の重要性

8

## 留学生の支援における留意点(まとめ)

- ・学生の多様な理解・期待を踏まえた情報発信・働きかけ
- ・来日前後の支援の継続性
- ・学生の卒業後、留学後にもつながる支援
- ・生活全体を支える支援
- ・関係者をつなぐ支援
- ・意識・認識の谷間を狭める働きかけ
- ・狭い意味での“コンプライアンス”を超えた支援

9

## 合理的配慮提供を支える相談支援 ～「繋がる支援」の現状と課題～

東京大学 相談支援研究開発センター  
コミュニケーション・サポートルーム  
川瀬英理

2021年度 東京大学バリアフリーシンポジウム(2022.2.9)

1

## 東京大学相談支援研究開発センター コミュニケーション・サポートルーム

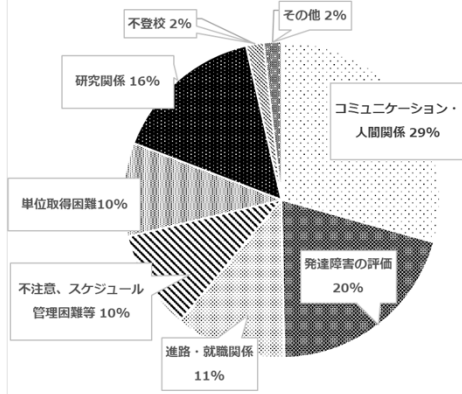
2005年4月、  
「発達障害者支援法(第2章8条):  
**大学**及び高等専門学校は、発達障害者の障害の  
状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものとする」

社会全体を見ても、発達障害への認識や理解が深まり、  
ニーズの多様さや高度化が求められた。

**2010年10月**、  
発達障害の相談に特化した  
「コミュニケーション・サポートルーム」を開室。

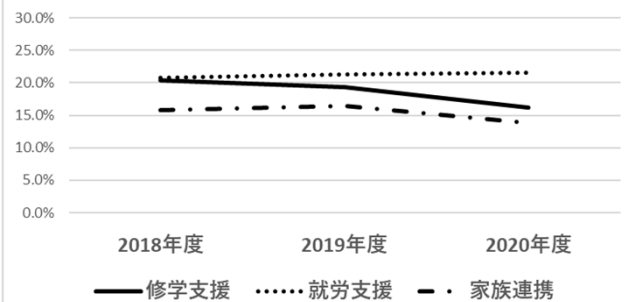
2

2020年度利用者の初回利用時の主な相談内容  
(継続利用を含む、コンサルテーション除く)



3

修学(教職員との連携)、就労、家族支援



4

## 発達障害の特性に関する大学での困りごと

### ◆ 修学

授業関係: 口頭発表、グループワーク、レポート提出等の困難、興味喪失など  
実験: 手先の不器用、段取りがわからない、要領の悪さ、  
自主的に質問できない

その他: 想像力や推論を必要とする内容の困難さ、  
研究室での人間関係のトラブル、独特な勉強方法へのこだわり、  
強制力の低さや報酬の見えにくさ、興味のないことに対する  
衝動性の制御困難(欠席、遅刻、課題未提出)

### ◆ 進路(進学・就職) \* 大学入試と就職活動のギャップ

社会参加のイメージのなさ(アルバイト未経験等)  
就労意欲のなさ: 勉強(進学)以外に必要な能力が低い、  
精神的苦痛が強いことへの拒否感が強い  
進路選択の決断困難: 多様な価値観や評価、  
「やりたいこと」の欠如ととらわれ

### ◆ メンタルヘルス

挫折や孤独感に伴う、抑うつ状態、適応障害  
睡眠障害、衝動や感情コントロール困難

5

## サポートメニュー

### ◆ 発達障害やその特性についての自己理解と精神面のフォロー

- ◆ 社会的マナー、会話のコツ、コミュニケーションのテクニックを知る
- ◆ 忘れ物・うっかりミス対策、整理整頓の工夫のアドバイスと行動形成
- ◆ スケジュール、時間管理、生活リズムを整える工夫のアドバイスと習慣化  
(例) レポートを期日までに提出できない(計画立案と実行の行動形成)
- ◆ 課題、期末テスト先延ばしに関する環境調整方法のアドバイスと行動形成  
(例) 集中学習室利用

### ◆ 修学支援:

バリアフリー支援室、精神保健支援室(保健センター精神科)等と協同し、教職員等に  
特性説明を行い、適切な支援が得られるように調整する

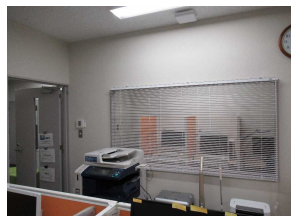
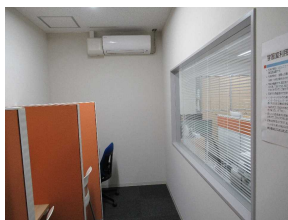
### ◆ 進路・就労支援:

進路選択、職業・企業選択、提出資料や面接のサポート  
就労支援機関や企業等との連携

### ◆ 医療機関との連携

6

## 集中学習室



7

## 相談室につながるには・・・

### ◆ 自閉スペクトラム症

- ・自分の感情や状況把握の困難さによる主観的苦痛感の起きにくさ
- ・問題の自己解決型
- ・コミュニケーションの困難さによる社交不安
- 報連相をしない、相談室利用のハードルが高い

### 【つながる工夫例】

- ・単位取得不可による成績悪化や留年、心身の健康の不調や回避行動等を、家族や教員が把握する
- 相談室に同行してもらう
- ・大きな困りごとをきっかけに、自主的にSOSを出す
- SOSの出し方が急であり、周囲のフォローが必要
- ・社交不安がある場合は、かなり丁寧に、穏やかに、慎重に対応する
- ・一度つながったら、困りごとがなくても、継続的に面談する
- ・主観的な困り感ではなく、よくある困りごとがないか相談員から確認
- \* ただし、一旦つながると、継続しやすい

8

## 相談室につながるには・・・

### ◆ 注意欠如・多動症

- ・不注意、衝動性、多忙等によるスケジュール管理の困難さ
- 遅刻や無断キャンセルになりやすい
- ・刺激や変化への衝動性、親和性
- 相談室への継続的な通所の困難さ
- 「地道な工夫」に対する苦痛、幻滅、諦め

### 【つながる工夫例】

- ・できるだけ同じ曜日、隔週60分よりも毎週30分の面談
- ・面談の次回予約時に、カレンダー等の記入を見守る
- ・オンライン相談や電話相談の併用や活用
- ・メール等によるコーチングにより面談時間以外もこまめに関わる
- \* 問題解決をしてくれるところ、楽しいところなどの認識となると継続する

9

## ～「合理的配慮」につながるための相談員の役割～

- (1) 学生生活上の適応を**定期面談で具体的に**聴取する中で、配慮の必要性を見極める。
- (2) 配慮の妥当性(1～3)をある程度考える
  - 1; その**障害に起因する**不適応への配慮か？
  - 2; **学術的要件**(授業の本質)に関わっていないか？
  - 3; **過度の負担**(教員の労働や心理的負担や経済的な面など)にならないか？
- (3) 本人に対する合理的配慮の説明とその希望の確認
- (4) 担当医がいる場合は、共同し、「1」の確認と診断書等の依頼
- (5) 合理的配慮の書類を当該学生、(担当医)、と共同で作成
- (6) 関係する教職員への配慮依頼を正式に申し込む際のコミュニケーション仲介やアシスト
- (7) 各部署での面談等のためのリハーサルと同席(フォロー)
- (8) 配慮実施中の定期面談による配慮の経過や困りごとの確認
- (9) 各部署の担当者または担当教員への連絡、調整

10

## 発達障害学生への相談支援で直面する課題 ～(相談や支援等への)つながる支援に関して～

### (1) 高校と大学の分断

支援を体系的に実施されている高校が少ないため、特性や配慮内容が大学に引き継がれることが少なく、相談支援には、本人や家族からの申し出が改めて必要

### (2) 修学支援には、本人の意思が必須条件

① 高校までと異なり、障害の自己理解(≒告知)が急に求められる

② 「障害」を理由とした配慮であり、「障害」として自己受容が前提なため、正式な「配慮」に抵抗を示し、配慮を受けられない学生が存在する

11

# 全国大学等の連携とプラットフォーム形成

近藤武夫

kondo@bfp.rcast.u-tokyo.ac.jp  
人間支援工学分野・准教授



東大先端研  
Research Center for  
Advanced Science and Technology  
The University of Tokyo

1

# PHED 障害学生支援プラットフォーム

- PHED (Platform of Higher Education and Disability)
- 障害のある学生の就学と就労、社会活躍を支えるための大学および企業によるプラットフォーム
- 「障害学生支援スタンダード」に基づく、各種ウェビナーによる研修事業・相談事業
- 支援機器ライブラリーの公開・共有
- <http://phed.jp>



※文部科学省補助事業 (H 29-R1, R2, R3-R5)

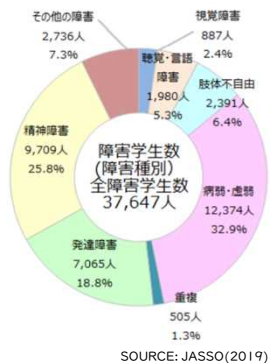
- 連携団体:
- AHEAD JAPAN (社) 全国高等教育障害学生支援協議会
  - ACE (社) 企業アクセシビリティコンソーシアム
  - PEPNet-Japan

2

## 大学での障害学生数の増加

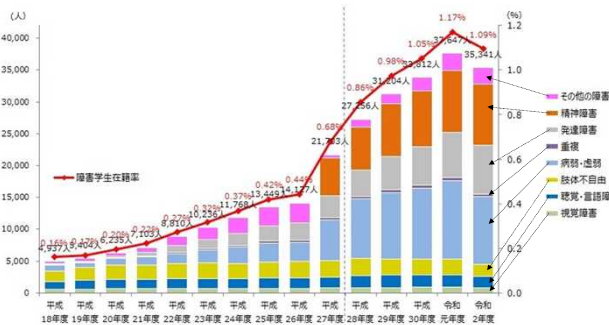
### 高発生障害

- 日本の障害学生統計も、精神障害・病弱・発達障害のある学生数が多数派に
- これらの障害は米国や英国では「高発生障害 (high-incidence disabilities)」と呼ばれており、日本でも同様の状況に



3

## 障害学生数は差別解消法施行前年から急速に増加、コロナにより減少



上図はJASSOウェブサイトより引用の上、発表者が凡例部分を改変 (引用元: [https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei\\_shogai\\_syugaku](https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku))

4

## 障害学生数の増加

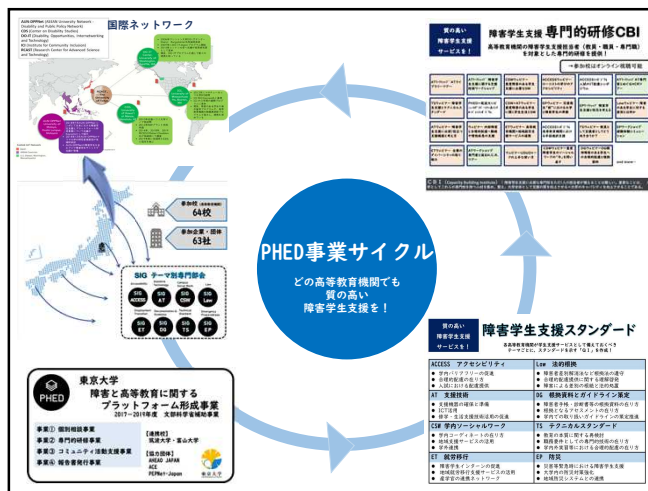
### 国際比較の観点から(1)

- 日本の障害学生数3.8万人は極端に少ない…今後日本でもインクルーシブ教育が進めば、大幅に増加することが予想される

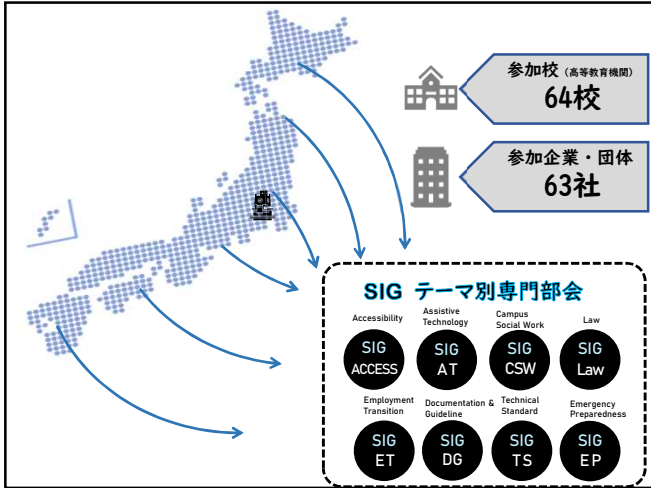
	障害学生比率	障害学生数	学生数	総人口
アメリカ	15.70%	340万人	2,200万人	3.28億人
イギリス	16.20%	31万人	240万人	0.67億人
日本	1.17%	3.8万人	320万人	1.26億人

SOURCE: 日本: JASSO(2019), アメリカ: U.S. Department of Education, National Center for Education Statistics, (2019), Digest of Education Statistics, 2017 (2018-07), Chapter 3, イギリス: House of Commons BRIEFING PAPER: Support for disabled students in higher education in England, Number 8716, 2 March 2020.  
※専修学校学生数66万人、各種学校11.7万人は日本の高等教育統計には含まれていない(算入すると約0.95%)

5



6



7

- 【参加大学】** ※登録日順
- 高知大学 学生総合支援センター
  - 熊本保健科学大学
  - 岡山理科大学 学生支援コミュニケーション支援課
  - 立命館大学 障害学生支援室
  - 九州大学 キャンパスライフ健康支援センター
  - 日本福祉大学 学生支援センター
  - 筑波技術大学
  - 亜細亜大学 障がい学生修学支援室
  - 立教大学
  - 四天王寺大学
  - 目白大学・目白大学短期大学部
  - 津田塾大学
  - 尚絅学院大学
  - 敬和学園大学
  - 埼玉県立大学
  - 北星学園大学・北星学園大学短期大学部
  - 新潟大学
  - 宮崎産業経営大学
  - 早稲田大学
  - 広島大学
  - 中村学園大学・中村学園大学短期大学部
  - 広島女子学院大学
  - 四国大学・四国大学短期大学部
  - 成城大学
  - 東京女子大学
  - 成蹊大学
  - 香川大学 学生支援センターバリアフリー支援室
  - 長岡造形大学
  - 岡山大学
  - 富山高等専門学校
  - 中部学院大学・中部学院大学短期大学部
  - 福井大学
  - 北海道大学 学生相談総合センター アクセシビリティ支援室
  - 国際基督教大学 学修・教育センター 特別学修支援室
  - 九州ルーテル学院大学
  - 福岡教育大学
  - 長崎純心大学
  - 広島大学 アクセシビリティセンター大阪電気通信大学 学務部 総合学生支援センター
  - 長岡技術科学大学
  - 山陽小野田市立山口東京理科大学
  - 京都工芸繊維大学 アクセシビリティ・コミュニケーション支援センター
  - 神戸大学
  - 明治大学
  - 帯広畜産大学 特別学修支援室
  - 東北大学 学生相談・特別支援センター
  - 鹿児島大学
  - 高取大学
  - 新潟工科大学
  - 札幌学院大学アクセシビリティ推進委員会
  - 駒沢大学
  - 和歌山大学
  - 静岡県立大学障害学生支援部会
  - 長崎県立大学佐世保校学生支援部 学生支援課 学生グループ
  - 東京工業大学学生支援センター バリアフリー支援部門
  - 同志社大学学生支援センター 障がい学生支援室
  - 宮城教育大学しょうがい学生支援室
  - 兵庫大学
  - 岐阜大学保健管理センター 障害学生支援室
  - 関西福祉科学大学・関西女子短期大学 学生支援センター

8

- 【参加企業・参加団体】** ※登録日順
- ◎ACE：企業アクセシビリティ・コンソーシアム会員企業
- 株式会社 IHI
  - アサヒビール株式会社
  - アスタラス製薬株式会社
  - EY Japan株式会社
  - キヤノンマーケティングジャパン株式会社
  - KDDI 株式会社
  - 株式会社JVCケンウッド
  - 株式会社TB
  - 清水建設株式会社
  - 株式会社生田銀行
  - 積水ハウス株式会社
  - セコム株式会社
  - 損害保険ジャパン株式会社
  - 株式会社和証グループ本社
  - 中外製薬株式会社
  - TOTO 株式会社
  - 凸版印刷株式会社
  - 株式会社ニシレイアウト
  - 日本自動車株式会社
  - 日本アイ・ピー・エム株式会社
  - 日本航空株式会社
  - 日本通運株式会社
  - 株式会社博覧会 OY ホールディングス
  - パソニック株式会社
  - 株式会社レスポナル
  - 富士フイルムビジネスソリューション株式会社
  - 株式会社アリダストン
  - プルム・グループ
  - 株式会社環境製作所
  - 株式会社みずほフィナンシャルグループ
  - ヤマトホールディングス株式会社
  - 株式会社 LIXIL
  - 株式会社リソナホールディングス
- ◎一般企業・団体 (自治体含む)
- 札幌市 保健福祉局 障がい保健福祉課 障がい福祉課就労・福祉支援担当係
  - 株式会社開福
  - 福井県電機株式会社
  - 特定非営利活動法人ゆに
  - RUI株式会社
  - 一般社団法人ハートウェアラボ
  - 増北デジテック
  - 社会福祉法人横浜やまびこの里 就労移行支援事業所ワークアノスト
  - 独立行政法人 日本学生支援機構 学生生活部 障害学生支援課
  - 社会福祉法人電機神奈川福祉センター
  - 社会福祉法人 南高学院
  - 障がい福祉推進株式会社
  - 社会福祉法人慶長会 障害者就労支援事業所「つづきの家」
  - 一般財団法人 発達支援研究所
  - 特定非営利活動法人「TEAM appreciate (株) Koien
  - 公益財団法人 東京しごと財団
  - 社会福祉法人 さいせい
  - 毎日教育総合研究所
  - 学校法人 山口学園 させぼろ者サポートステーション
  - 有限会社エクストラ
  - 社会福祉法人 大信屋
  - ソフバンク株式会社
  - 全日本ろう学生懇話会
  - 在宅ケアものごとこ 思い研究所
  - 株式会社 Japan 株式会社
  - 日本財団
  - クラスメソッド株式会社 ダイバーシティ推進室

9

**障害学生支援スタンダード**

各高等教育機関が学生支援サービスとして備えておくべきテーマごとに、スタンダードを示す「QI」を作成！

ACCESS アクセシビリティ	LAW 法的根拠
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学内バリアフリーの促進</li> <li>● 合理的配慮の在り方</li> <li>● 入試における配慮提供</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 障害者差別解消法など根拠法の遵守</li> <li>● 合理的配慮提供に関する理解啓発</li> <li>● 障害による差別的根拠と法的処置</li> </ul>
AT 支援技術	DG 根拠資料とガイドライン策定
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 支援機器の確保と準備</li> <li>● ICT活用</li> <li>● 学修・生活支援技術活用の促進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 障害者手帳・診断書等の根拠資料の在り方</li> <li>● 根拠となるアセスメントの在り方</li> <li>● 学内での取り扱いガイドラインの策定推進</li> </ul>
CSW キャンパスソーシャルワーク	TS テクニカルスタンダード
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 学内コーディネートの在り方</li> <li>● 地域支援サービスの活用</li> <li>● 学外連携</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 教育の本質に関する再検討</li> <li>● 職務要件としての専門的技術の在り方</li> <li>● 学内外実習等における合理的配慮の在り方</li> </ul>
ET 就労移行	EP 防災
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 障害学生インターンの促進</li> <li>● 地域就労移行支援サービスの活用</li> <li>● 産学官の連携ネットワーク</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 災害等緊急時における障害学生支援</li> <li>● 大学内の防災対策強化</li> <li>● 地域防災システムとの連携</li> </ul>

10

**Sig Special Interest Groups**

<b>ET 就労移行</b> 輪田 暁 (EY Japan株式会社) 松本 悠 (山崎大学) 藤原 有作 (九州大学) 柳村 真 (株式会社リクルート) 岸田 健二 (社団法人すいせい) 藤田 智 (社団法人すいせい) 坂野 武夫 (東京大学) 本宮 真 (筑波大学) 高沢 真 (熊本県庁)	<b>DG 根拠資料とガイドライン策定</b> 渡邊 真一 (東京大学) 高橋 知希 (信州大学) 立崎 洋介 (九州大学) 田口 竜樹 (目白大学)	<b>Law 法・制度</b> 大沼 誠 (弁護士) 川島 誠 (岡山理科大学) 関 隆人 (弁護士)		
<b>ACCESS アクセシビリティ</b> 佐々木 健司 (筑波大学) 白澤 真子 (筑波技術大学) 岡田 真 (文部科学省学生支援センター) 中野 泰志 (奈良県立大学) 高松 和哉 (大学入試センター)	<b>CSW キャンパ ソーシャルワーク</b> 大村 真保 (筑波大学) 野村 真一 (東京大学) 五城 洋一 (信州大学) 村田 洋 (京都大学) 池谷 誠介 (岡山大学) 藤原 智哉 (岡山大学)	<b>TS テクニカルスタンダード</b> 嶋田 千尋 (熊本保健科学大学) 西村 健太郎 (富山大学) 松田 健 (独立行政機構) Peter Bernick (長崎大学) 日下部 敬 (富山大学) 小倉 正真 (専門学校)	<b>EP 防災</b> 湯井 幸奈 (立命館大学) 佐藤 明介 (筑波大学) 森脇 愛子 (青山学院大学) 竹田 瑞平 (福井工業大学)	<b>AT 支援技術</b> 奥山 健博 (日本VITA協会) 山口 俊成 (和歌山大学) 渡辺 宗文 (日本福祉大学) 伊藤 英一 (情報バリアフリー)

11

**Quality Indicator (QI) 作成**

質の高い障害学生支援のために

1. 知識体系の整理  
➡ 障害学生支援のスタンダード集へ
2. コストとリソースの獲得方法
3. 理解啓発へ

12

質の高い  
障害学生支援  
サービスを！

## 障害学生支援 専門的研修CBI

高等教育機関の障害学生支援担当者（教員・職員・専門職）を対象とした専門的研修を提供！

→参加校はオンライン視聴可能

ATワークショップ ATライブラリーツアー	ATワークショップ 障害学生支援に関する支援技術ワークショップ	CSWウェビナー 重度障害のある学生支援に必要なSW	ACCESSウェビナー ロゴコストの学びのアクセシビリティ	ACCESSワークショップ 入試のIT配慮シナジウム	ATワークショップ AT専門家とめぐるHCRツアー
TSウェビナー 障害学生支援とテクニカルスタンダード	PHED+筑波大ナビニール 障害学生支援における大学と学生の関係	CSW+ATウェビナー 重度障害のある学生に関する学生生活とSW	EPウェビナー 障害学生支援と防災を考える	EPワークショップ 障害学生支援と防災を考える	Lowウェビナー 障害のある学生に対する差別とは何か
ATウェビナー 障害学生支援に必須の役立つ支援機器と考え方	ウェビナー 内部障害と合理的配慮-障害や慢性疾患の支援	ETウェビナー 高等教育機関や地域経済支援サービスの連携	ACCESSワークショップ 高等教育機関における手話通訳支援	TSウェビナー 教員として支援者としてどう向き合うか？	EPワークショップ 模擬体験シミュレーション
ETウェビナー 企業のダイバーシティの取り組み	ATワークショップ 専門家と巡るH.C.R.ツアー	ウェビナー UDUDUトークの上手な使い方	CSWウェビナー 重度障害学生のソーシャルワークの「今」を問い直す	DGウェビナー DG障害のある学生への合理的配慮と根拠資料	and more...

C B I (Capacity Building Institute)：障害学生支援に必要な専門性をた一人の担当者が備えることは難しい。重要なことは、大学としてこれらの専門性を持つ人材を集め、整え、大学全体として支援の質を向上させる＝大学のキャンパスを向上させることである。

13

①TS専門的研修CBIウェビナーの様子 ② ATライブラリー公開

③AT専門的研修CBIツアーの様子 ④EP専門的研修CBIシミュレーションの様子

14

## 個別相談

- PHEDウェブサイト、電話、メール、FAXによる受付
- 障害学生、障害のある教職員からの相談
- 大学・障害学生支援者からの相談
- 一般学生（支援学生）からの相談
- 企業・自治体からの相談

15

## コミュニティ活動支援

- 全国でのタウンミーティング（各地域の大学・企業・行政の連携構築会議）開催
- 長崎、福岡、熊本、名古屋、岐阜、金沢、福井、富山、札幌、東京、神戸

<https://phed.jp>

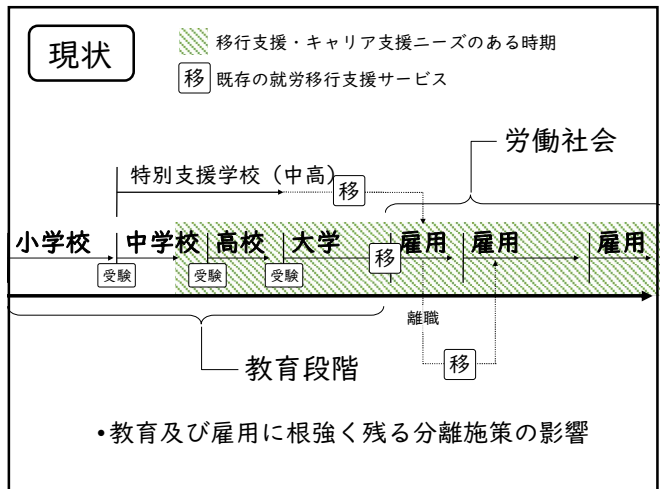
@PHED\_U\_Tokyo

16

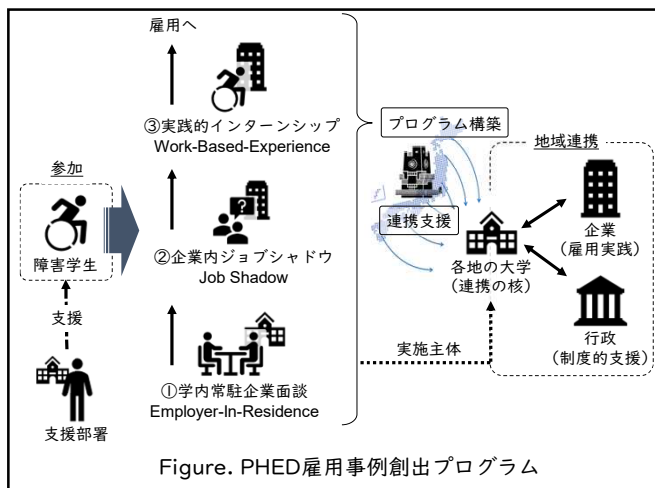
## AT ライブラリー

- AT（支援技術）ライブラリーを設置 <https://phed.jp/at/>
- 多様な障害ニーズに対応する100点以上の支援機器を自由に見て、触れることができる（専門家による説明・相談支援あり）
- 大学・企業への2週間の無償貸出
- ATライブラリー公開も不定期にオンライン及びハイブリッドで開催

17



18



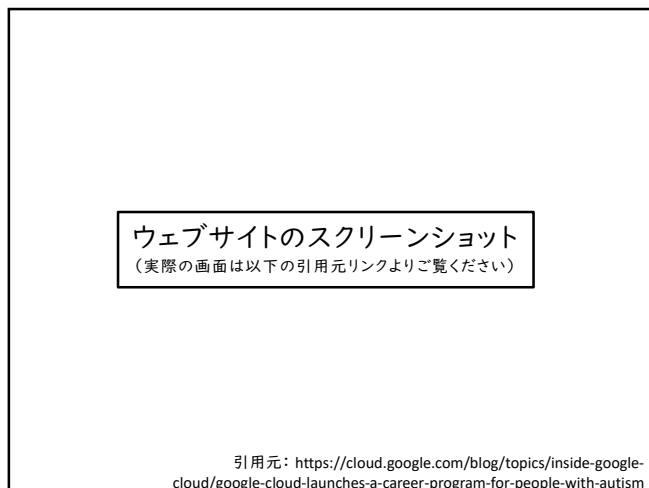
19



20



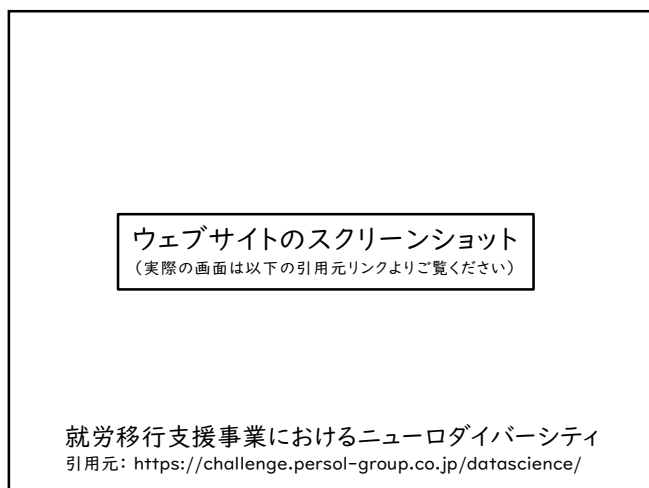
21



22



23



24



ウェブサイトのスクリーンショット  
(実際の画面は以下の引用元リンクよりご覧ください)

「異能人財採用プロジェクト」  
引用元：<https://www.kaizen-lab.com/job-interview/friend013/>

25

## IDIS Symposium

- ・アジア・環太平洋地域での障害と教育・雇用のインクルージョンに関する国際シンポジウム(年1回開催予定)
- ・昨年度第2回IDISは計13カ国から約170名、今年第3回は19カ国から約200名が参加
- ・ <https://www.idis-symposium.org/>



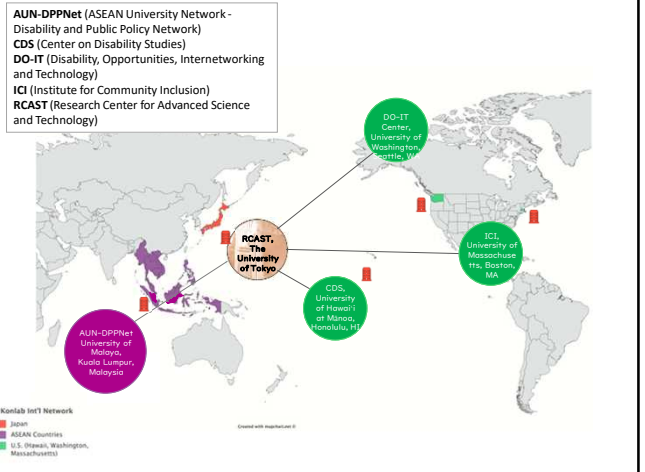
共催： - 京都大学HEAP  
- ハワイ大学 Center on Disability Studies  
- ASEAN Univ Network DPPNet

26

## AUN Member Universities

Brunei Darussalam Universiti Brunei Darussalam (UBD)	Malaysia Universiti Malaya(UM) Universiti Sains Malaysia (USM) Universiti Kebangsaan Malaysia (UKM) Universiti Putra Malaysia (UPM) Universiti Utara Malaysia (UUM)	Singapore National University of Singapore (NUS) Nanyang Technological University (NTU) Singapore Management University (SMU)
Cambodia Royal University of Phnom Penh (RUPP) Royal University of Law and Economics (RULE)	Myanmar University of Yangon (UY) Institute of Economics, Yangon (IEY) University of Mandalay	Thailand Burapha University (BUU) Chulalongkorn University (CU) Chiang Mai University (CMU) Mahidol University (MU) Prince of Songkla University (PSU)
Indonesia Universitas Gadjah Mada (UGM) Universitas Indonesia (UI) Institut Teknologi Bandung (ITB) Universitas Airlangga (UNAIR)	The Philippines De La Salle University (DLSU) University of the Philippines (UP) Ateneo de Manila University (ATMU)	Viet Nam Vietnam National University, Hanoi (VNU-HN) Vietnam National University-Ho Chi Minh (VNU-HCM) Can Tho University (CTU)
Lao PDR National University of Laos (NUOL)		

27



28

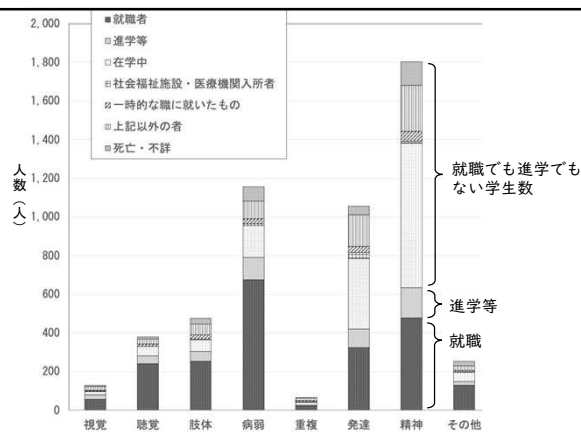


Figure. 障害種別ごとの最高年次障害学生(大学)の進路状況内訳とその人数

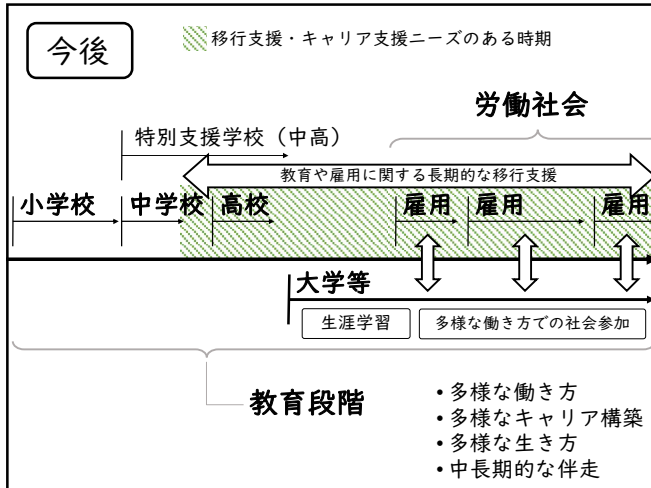
図中のデータは「表68. 進路状況(学校種別・障害種別)(大学)(日本学生支援機構 2018年実地調査報告書 64ページ)」より(一部、筆者が再構成を行った)

29

## 進路状況から見える課題

- ・ 大学学部卒業生の就職率77.1%、うち正規雇用は74.1% (2018年度学校基本調査)と大きく異なる状況
- ・ 精神・発達障害、病弱のある学生が、修学や就労に関し苦闘していることが量的に顕著
- ・ 他、身体介助を必要とする学生は優秀であっても一般就労の道が極端に制限される
- ・ 文部科学省「重度障害学生に対する支援のあり方に関する調査研究」AHEAD JAPAN受託研究
- ・ [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/itaku/1422185.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1422185.htm)

30



31

障害のある児童生徒・学生の社会的活躍を支える

I. 学校・大学が「**修学を支援する**」

1. 個人の学びのプランニングや学習を支援する（チュータリングを含む）
2. 独自のニーズに合う学習方法を提案する（ICT他、支援技術活用等の多彩な手法）
3. コーチング（本人が自発的に達成目標に向かうことを伴走支援する）を行う

II. 学校・大学が「**差別禁止と合理的配慮により教育機会を保障する**」

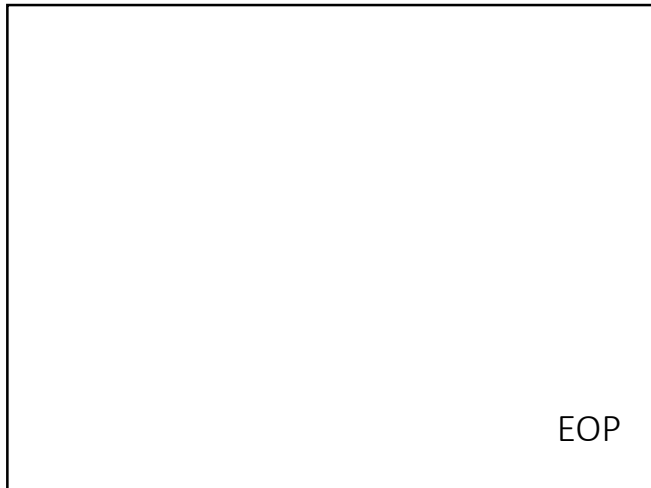
1. 通常の学級・クラスでの学びの保障を主として、授業や試験でのイコールアクセス（合理的配慮）を、初等中等教育段階から徹底する
2. ソフトスキル（ニーズの理解、自己決定や自己権利擁護）を早期（初中教育、特に中等教育段階）から学ぶ機会を提供し、それと対話できる学校体制の整備を行う
3. アセスメントを受ける機会を提供する（自己理解支援やエンパワメントに関連する情報提供も行う）

III. 地域社会が「**児童生徒・学生が伴走型の就労移行支援と生活支援を得る機会を創出する**」

1. 生活スキル（福祉資源の活用、余暇活動、実行機能の育成などを含む）を学ぶ機会
2. 実践的に働く機会（Work-based learning）を通じて学ぶ機会
3. 社会で活躍する障害等のあるロールモデルに出会う機会
4. 教育から雇用への中長期的な移行を支援する社会資源を本人主体で活用する機会
5. 必要な資源・機会を提供・確保するインフラを整備する

32

32



33

参考文献

教室や入試、大学での配慮に関する  
書籍・論文

34

34

References : 障害学生支援

- 東京大学PHED. 障害学生支援スタンダード集.  
<https://phed.jp/about/standard.html>
- 独立行政法人日本学生支援機（編著）合理的配慮ハンドブック. [https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu\\_shien/hand\\_book/](https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/hand_book/)
- 竹田一則 編著（2018）よくわかる！大学における障害学生支援. ジアース教育新社.
- 川島 聡・飯野 由里子・西倉 実季・星加 良司（2016）合理的配慮 対話を開く対話が拓く.有斐閣.

35

35

References : 入試の配慮

- 近藤武夫（2020）障害のある人々の受験. 大学入試がわかる本 改革を議論するための基礎知識. 中村高康 編, 岩波書店.
- 近藤武夫 編著（2016）学校でのICT利用による読み書き支援 合理的配慮のための具体的な実践. 金子書房
- 近藤武夫（2017）高等学校や大学の入試の配慮や入学後の配慮. 中等教育資料, 66(9), 104-107.
- 近藤武夫（2017）入試や試験での合理的配慮としてのICT利用—合理的配慮の合意形成に関する事例から— LD, ADHD & ASD, 15(3), 20-23.
- 近藤武夫（2017）障害者差別禁止を理解する. 学校運営, 668, 6-9.
- 近藤武夫（2016）障害のある受験生に対する合理的配慮, 大学時報, 65(370), 44-49.
- 近藤武夫（2016）入学者選抜試験における受験上の配慮：配慮を受けるまでの実際について, 中等教育資料, 65, 88-91.

36

36

## References : ICT活用

- 近藤武夫 編著 (2016) 学校でのICT利用による読み書き支援: 合理的配慮のための具体的な実践. 金子書房.
- 中邑賢龍・近藤武夫 監修 (2019) 発達障害の子を育てる本 スマホ・タブレット活用編. 講談社.
- 近藤武夫 (2015) 障害のある学生への合理的配慮. 大学時報, 362, 84-91.
- 近藤武夫 (2014) 「思いやり」から「常識」へ—DO-IT Japanの挑戦、知のバリアフリー. 嶺重 慎・広瀬浩二郎 (編), 東京大学出版会, 98-101.
- 近藤武夫 (2012) 読み書きできない子どもの難関大学進学は可能か? 中邑賢龍・福島智 (編) バリアフリー・コンフリクト. 東京大学出版会.
- DO-IT Japan : 障害のある小中高校生の高等教育移行支援・大学生の就労移行支援を通じたリーダー育成プログラム. <http://doit-japan.org/>
- 日本学生支援機構 : 障害学生支援情報  
[http://www.jasso.go.jp/tokubetsu\\_shien/](http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/)

37

37

EOF

38



memo



### Ⅲ. (付録)資料

『学内広報』掲載コラム  
「バリアフリー最前線！」より  
第14回～第29回  
(令和元年6月号～令和3年12月号掲載)



熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場①



## 排除のゲームから包摂のゲームへ

人はなぜ、差別をしてしまうのだろうか。松井氏はこの問題に、ゲーム理論と呼ばれるアプローチで迫ってきた。

子ども時代は典型的な理系少年。引っ越しが多く、転校生として味わった疎外感が、今の研究に影響しているかもしれないと振り返る。日本が

バブル景気に足を踏み入れつつある頃、理科I類に入学。気象学や生態学に興味があった松井氏は公害問題に関心を寄せていく。学友と議論する中で、「自然環境を考えるには人間社会を読み解く学問が必要だ」と思い、理数系の知識を活かせる社会科学を学ぼうと経済学部へ進学。当時、経済学において市場理論は完成に近づき、研究の余地はほぼ残っていなかった。代わりに、市場に限らない様々な人間関係を論理的に研究する「ゲーム理論」という新領域が注目され、松井氏もこれを専門に、と決意する。ゲーム理論では、人間関係を一種のゲームとみなし、じゃんけんのような単純なゲームのモデル化から始めて、市場理論が十分に記述できなかった様々な人間関係の記述に成功してきた。

とりわけ松井氏は、帰納的ゲーム理論の提唱者として知られている。例えば差別。私たちは、まず心に偏見があって、その結果、差別的行動が引き起こされると考えがちである。しかしこの理論によれば、まず人が、差別的行動を是とする社会に理由もわからず巻き込まれ、事後的な正当化によって偏見が胎動することもあるという。このことは、内心の自由を担保しながら、行動レベルで差別を禁止する法の有効性に理論的根拠を与えるものでもある。

理論は現場との相互作用によって洗練される。松井氏は、2001年に東大に着任した視聴覚の障害をもつ福島智氏との出会いを機に、障害分野に経済学を応用する研究領域を立ち上げた。並行して、東大のバリアフリー化でも障害者雇用を中心に体制整備を行ってきた。差別だけではない。そもそもある人が障害者になるかどうか自体、社会がどんなゲームを展開しているかに依存する。例えば手話が公用語の地域では、耳が聞こえなくても障害にならないだろう。障害の問題は、こうしてインクルーシブなゲームの問題に帰着する。

ゲームを読み解き、人々の選択をバリアフリーへと水路づけるゲームを設計する——大学ならではの学知に基礎づけられたバリアフリー支援実践がここにある。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

経済学研究所  
松井彰彦 教授の巻



熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場②



## 症状の消失から人生の回復へ

左右を間違えずに靴を履くこと、不安をやりすこすこと、思考を言葉にすること—周りの人々が当たり前に行っていることが自分にはできない。今から振り返ると生き辛さを抱えた少年時代だった。一方で、障害のある同級生のサポート係になるなど、排除されがちな仲間

医学系研究所  
笠井清登 教授の巻



に自然と寄り添う面もあった。その後、私立の中学校に進学。似た仲間のコミュニティに身を置き、徐々に生きづらさが軽減していく。その頃、精神科医フランクルの著作などにも影響を受けつつ自身の来し方を振り返り、精神科医を志すようになり理科三類に入学した。

当時の東大精神科は外来派と病棟派の抗争が続いていたが、今さら志を変えるわけにもいかず、精神科に入局。外部病院での研修中も地域の作業所に挨拶周りに行くなど、地域に出向いていく臨床スタンスは赤レンガから学んだものでもあった。同時に、医学部でも周縁化されがちだった精神医学には生物学的研究が必要と考え、寸暇を惜しんで研究に没頭した。

やがて、生物学的研究を身につけた自分と、当事者性を見え隠れさせながら理解者ぶる自分とを、器用に使い分けることに葛藤を感じ始める。そうした頃、東日本大震災が起きる。居ても立っても居られず、頻繁に現地に赴き、教職員総出でこころのケア活動を担った。それを機に、医療のアウトカムは症状の消失だけではなく、地域文化に根差した人生の回復であること、その過程で精神医学が果たすべき役割を再認識。リカバリー・アプローチ、大学精神科へのピアサポートワーカーの導入など精神保健領域における先端の実践にも注力してきた。

少年時代の笠井氏がまさにそうであったように、集合的に再生産される無意識的価値観の中で、少数派は常に戦いを強いられる現状がある。しかし笠井氏は、むしろ多数派にこそ自分の無意識が行動に与える影響を意識化させ、多様な価値観や多数派・少数派間の権力勾配を自覚できる力を滋養するのが東京大学の役割だと述べる。個人史を原点に置き、現場から離れず、確かな専門知を通じて公正な社会を実現する—無意識の中にあるバリアに精神医学をもって挑む笠井氏の実践は、東京大学のバリアフリーが向かうべき未来を指し示している。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

## バリアフリー最前線!



熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場③

インクルーシブなキャンパスを  
実現する建築学

大学という場は、少しずつ多様性を増してきている。それとともにキャンパスの姿も変化してきた。松田氏の専門は、多様な人々が、自分たちが使う公共財のデザイン過程に参画する「ユニバーサルデザイン」という考え方で、いわばデザイン自体の民主化を意味する。インクルーシブなキャンパスを実現するために不可欠な考え方だ。

工学系研究科  
松田雄二 准教授の巻



筆者と同じ95年に東京大学に入学した松田氏は、キャンパスの25年間の変化を感慨深く振り返る。学生当時、音楽サークルに所属していた松田氏は、駒場の学生会館にたむろする車いすに乗った学生——そう、筆者だ——を見かけていたという。その後、建築学専攻修士課程のころ、視覚障害の学生が東大工学部へ進学したことが現在の専門につながった。本郷キャンパスで視覚障害者誘導用ブロック計画を作成し、本人からの評判は上々であった。他方で、駒場キャンパスの改善までは、手がつけれられなかったと振り返る。また同じ研究室には、耳の聞こえない学生が在籍していた。当時は聴覚障害のある人への制度化された支援も皆無だったため、ゼミでの発言を黒板に書きだすなど、試行錯誤の支援を手弁当で行っていたという。いくつかの大学を経て、2015年に東大に戻ったときには、支援体制の充実ぶりに驚いたという。

松田氏によれば、建築設計という仕事は、建物が備えるべき様々な機能をひとつの「形」に纏め上げるものだ。2000年以降の様々な障害関連の法制度の整備を背景に、障害のある学生や教職員が徐々に増えるにつれ、大学が備えるべき機能も変化し、そこかしこに自動ドア、車椅子でも使えるトイレ、エレベーターなどが設置されてきている。ただ、多様性は障害領域だけではない。宗教、LGBTなどの多様性を包摂するキャンパスデザインはこれからの課題だという。

ユニバーサルデザインを実現するためには、テーブルに手が届く多様なニーズを纏め上げるだけでなく、そもそも多様なユーザーが最初からテーブルにアクセスできなくてはならない。事後的な改修では満足度が低く、費用も高くつく。「はじめからみんなで作るキャンパス」を実現する上で、松田氏の研究と実践は方法論的な基盤を示唆している。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

## バリアフリー最前線!



熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場④



## 支援室の羅針盤——理念、専門知、実践知

東京大学にバリアフリー支援室が発足し15年になる。以前の障害者支援は各部局が行っており、支援ノウハウが散逸してしまうという問題があったため、学内全体でノウハウの蓄積と提供を行うべく、支援室が設置された。そして、こうしたノウハウの蓄積や更新を担うのが、支援室の専任教員である垣内氏と中津氏である。

バリアフリー支援室  
垣内千尋 准教授  
中津真美 特任助教



中津氏は、設立時から長く支援室を支えてきた。専門は聴覚障害支援学で、支援室では、文字通訳等の情報保障を中心に、身体障害領域をカバーする。CODA（聴覚障害者の子どもを意味するChildren of Deaf Adultsの略語）としての自身の生い立ちを振り返り、ごく普通の家族だと思っていたのに、周囲から注がれた「がんばってるね」という特別な視線への違和感が、障害者への理解を広めたいという思いにつながったと述べる。「知らないことは分断を生む」という信念のもと、支援実践に加え中津氏はCODAの心理・社会的研究にも取り組んでおり、少しずつだが社会の変化に手ごたえを感じてきているという。

垣内氏は、基礎と臨床の両方に造詣の深い精神科医として、本学でもニーズが増し続けている精神疾患や発達障害の支援を主に担う。支援室は「障害は本人と環境のミスマッチである」という社会モデルの視点に立ち、主に環境側の改変による障害の軽減を目指す。精神疾患の場合は病状改善の可能性の評価が容易でなく、医学的介入と環境改変のバランスの取り方は時に難しい。さらに、人生のある時期で精神疾患を経験した本人は、新しい自己像、進路や価値観を再構築する課題にも直面する。本人の意思を実現するという基本を踏まえつつ、複数の意思や欲動の葛藤状況そのものに寄り添う支援の重要性を垣内氏は強調する。

両氏は、機会の平等という理念を強調する。その一方で現実には経済面・人材面などの制約があり、要望のすべてが実現するとは限らない。そのような中、実践面で重視するのが配慮決定プロセスの明確化だ。何ができて何ができないのか、できないのはなぜなのか、代替案はあるのかなど、丁寧な対話を重ねる。日々突きつけられる難題を前に支援室が航路を見失わないために、理念、専門知、実践知を担う2人の専任教員の存在は大きい。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp



熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場⑤



## ダイバーシティを実現する 社会モデルの考え方

幼少期から視覚に障害のある星加氏は、高校まで統合教育を受けてきたが、教育委員会から毎年「来年度は盲学校へ」と説得されるなど差別的な扱いも経験してきた。やがてそうした社会の成り立ちに興味を持ち始めたが、高校までは社会は法と金で動いている

教育学研究科  
星加良司 准教授の巻



のだろうかと思っていたという。大学入学後、直接的な人間関係を深く取り持つ中で、法と金以外の機微で社会が動いている側面に気づかされる。卒業で社会学の面白さに気づき大学院への進学を決めたが、当時は、障害者として扱われてきたことへの反発もあり、障害を研究対象にするつもりはなかった。

だが深く学ぶにつれ社会学における障害問題の重要性に気づいていった。星加氏によれば社会学は、フランス革命以降、封建制や宗教が力を失い、新たな秩序を模索する中で生まれた学問だ。近代的秩序の原理として、能力を基準に財と機会を配分する能力主義が重視され、裏面で、能力の低さとして規定される障害問題が生み出された。星加氏には、障害問題を通して社会全体が見えてくるという直観があった。

星加氏が専門とする障害学には「社会モデル」という考え方がある。個人の特質には差があるが、すべての差異が等価値に扱われるわけではない。有利に扱われる特質を持ち、差異の扱い方自体を決められるマジョリティと、不利に扱われる特質を割り当てられるマイノリティとの間に非対称性が生まれる。社会モデルとは、マジョリティ-マイノリティ関係として障害問題を捉える視角である。現在、社会モデルを人々に定着させる教育プログラムを開発している星加氏は、社会モデルにはマジョリティの特権を掘り崩す面があるため、マジョリティ側の反発を抑えつつ本質を伝えるための工夫がポイントだと言う。

星加氏も強調するように、障害学など人類史的課題に取り組む研究は、短期的効果が見えにくい。しかし、分断に抗して発展する社会を実現するためには、細分化された課題への短期的成果の集積とは異なる、こうした研究が評価されるシステムが必要だ。星加氏の社会モデルの理論・実証研究は障害のみならず広くダイバーシティとインクルージョンを実現する上で欠かせない基盤を与えようと言える。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp



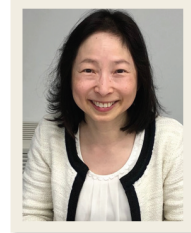
熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場⑥



## 気後れしないインクルーシブな 共創空間の条件

子ども時代は運動が苦手で泣き虫。快活な同級生たちに気後れしがちな自分は、生き馬の目を抜くような大人社会で生きていけるのだろうか、子ども心に不安だった。理科2類に入学後、人の心や脳に関心があり医学部保健学科(現・健康総合科学科)に進学。看護経験をもつ学士編入生に魅力を感じ、看護コースを選択した。

医学系研究科  
宮本有紀 准教授の巻



看護実習では落ちこぼれ学生で、辛くて病棟実習に行けなくなることもあった。しかし4年の冬、看護管理実習で東大精神科病棟に行き、ロールモデルとなる師長と出会う。規範からの逸脱を厳しく評価するのではなく、何でもどんと来いという佇まいのその人は、悩みを抱え込まず、同僚にも自分の気持ちをオープンに話していた。「こういう場所なら、自分も働けるかもしれない」と思った。

卒業後、修士課程で認知症の記憶に関する研究をし、語りを聞くことの面白さに気づく。精神科病棟での臨床を経て、精神看護学の博士課程に進学。調査先の東京武蔵野病院に魅力を感じ、博士課程終了後に看護師として就職、急性期病棟に配属された。最前線の医療者から多くを学ぶと同時に、望ましくない身体拘束や隔離さえ、いつの間にか当たり前の習慣になっている自分に戸惑いを覚えた。

その後、教員として東大に戻り、精神障害者自らが、仲間や支援者とともに、自分が望む生き方が何なのか、どうすれば実現できるのかについて取り組むセルフマネジメントを研究し始める。世界の先進的な取り組みに学び、当事者と専門家が知識や技術を一緒に作る「共同創造」の重要性に気づく。

専門家を前に当事者は、「知識も技術もない劣った自分はこの場にいてはいけない」と委縮しがちだ。それは、宮本氏自身が幼いころから味わってきた感情とも重なる。共同創造が単なるお題目にならないためには、専門家も自分の限界を開示し、参加者皆が「この場に居ていい」と感じられる空間を作るべく努力が必要だ。

所在ない講義や実習、発言しにくいと感じる会議は、大学の中にありふれている。多様な構成員が、誰ひとり置き去りにされず、自由闊達に意見を交わすことで新しい知識と技術を生み出すキャンパスを実現するためのヒントが、宮本氏の研究にはある。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp



## バリアフリー最前線!



熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場⑦



## 世界にそそぐ視線を揃える

：質的心理学から見えるバリアフリー支援

中学までは田舎で不自由なく過ごすも、高校ではその地方の進学校に入り、自信のなさや活舌の悪さも影響してか、人間関係に“居心地の悪さ”を感じていた。当時の能智氏はその理由を広く言葉の問題に見出し、本学入学後は文学部心理学科で言語心理学を学ぶ。

卒業論文では、言い間違いをテーマに実験的な研究を行ったが、自身がこれまで抱えてきた問題意識に答えられていない感覚が残り、大学院へ進学する。

修士課程で、言いたい言葉が出てこない「喚語困難」という失語症の症状が、前後の文脈に影響されることを明らかにした。しかしその困難がその人にとってどのような意味を持つかに迫れていないと感じ、博士課程で様々な研究方法を模索する中で、重度障害のあるわが子に対して「人間性」を感じるようになるまでの親の心理的プロセスを、質的研究の手法で明らかにしたD・ピクレン教授の論文に出会う。心理学研究室の先輩の後押しもあり、ピクレン氏の研究室に留学。頭部外傷の後遺症を持つ人々の自己像の変遷をテーマに質的研究を行い、帰国後は、専門誌の発行や学会の設立等を通じて、質的心理学を国内に紹介してきた。

氏によれば質的心理学は、人の行動を外から予測しコントロールするために数量化・モデル化する従来の行動科学とは異なり、その手前にある概念化・言語化の過程に内在的に寄り添おうとする。例えば、“暴力的な行動”をカウントする量的研究は、“暴力”という概念の定義を所与とすることが多いが、質的研究は、その概念がいかに心や社会の中で成り立っているかを検討する。

失語症など脳損傷症状をもつ人を対象に研究してきた能智氏は、自分の研究は単に「彼ら」の特殊な経験を描き出そうとしているだけでなく、失語症者と自分がともに生きている「共通の世界」を理解することが目標だという。その過程で、相手の話が自分の話にふとつながる瞬間があり、それが彼らのために何ができるのか、という問いを導くのだと強調する。優れた支援は、対象者を自分と切り離して扱うのではなく、世界に注ぐ視線を揃えた先に実現する—能智氏の研究は、制度化される中で失われがちな、重要な支援者の姿勢を指し示している。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

## バリアフリー最前線!



熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場⑧



## 応答、多様性、越境

：バリアフリーなアカデミアに向けて

都市の人々は、隣人を人間扱いしているだろうか。東京生まれ、幼いころから他人を石ころのように扱う都会の人混みが苦手な西成氏は、渋谷駅の雑踏で倒れ病院で検査を受けたことさえあった。また、数学に没頭する少年時代、必ずしも裕福ではなかった両親は内職をしながら応援したが、ある時「東大まで行って数学をして、何の役に立つの？」と聞かれ自問した。これだけ与えられる中で、好きなことだけやっていいのか——でも、数学がやりたい。

応用数学を志し理科I類に入学。流体力学を専攻するも「何の役に立つの？」という声は疼き続けた。そんな時「苦手だった人混みを、流体现象としてとらえられないか」という着想に至る。しかしそれは新領域を立ち上げることであり大きなリスクを伴った。悩んだ末に、尊敬する先輩の「人生は諦めるかやり抜くかの2つしかない、7年はやれ」という言葉に背中を押され、20代後半で大きく研究テーマの舵を切る。縦割りのアカデミアで分野横断的な研究は支援を得にくく、4年ほど持ち出しの状況は続いたが、徐々に注目されるようになった。

流体には流量=密度×速度という関係があり、横軸に密度、縦軸に流量を取ると、増加から減少に転じる臨界点が観察できる。氏は世界ではじめて臨界点を越えた状態として様々な渋滞を定義し、人や車だけでなく、物流やバブル崩壊、セルロース分解過程に至るまで、数多くの現象を解き明かしてきたが、最初の応用例は巧妙に渋滞を回避するアリの研究だった。のちにある養蜂家にアリが渋滞しない理由を尋ねたところ「彼らは同じ個体から生まれた家族だからだよ」と教えられた。アリが実現している個と全体、利己と利他のバランスを人間社会に実装することが渋滞学の最終目標だ。それは、個として数学を愛しながら、同時に「何の役に立つの？」という声に応答し続けてきた氏ならではの到達点かもしれない。

社会課題に多分野が共同して応答するのではなく、個別領域に閉じて業績を積み上げるアカデミアに対しても、変革が必要だと強調する。それはまさに、氏が苦勞しつつ歩んできた道でもある。社会への応答、多様性、越境——バリアのない力強い知の実践がここにある。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

## バリアフリー最前線!



熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場⑨



## 生き延びるためのダイバーシティ

高校生のころ、母は、48歳で自らの命を絶った。学校から帰宅すると警察官と救急車が来ており、父は心臓マッサージをしていた。「また、あの家か」と言わんばかりの横柄な態度の警察官。父は氏に、冷たくなった母の足をマッサージするように言った。「でも、母はこのまま亡くなった方が良いのではないか」——そう感じたことが今も、氏の心に棘として刺さっている。

相談支援研究開発センター  
渡邊慶一郎 准教授の巻



小学高学年の頃から母の精神症状が出始め、徐々に近隣や父との関係も険悪になる。同級生の家に遊びに行き、「これが普通の母親なのか」と驚くこともあった。中学生の頃、母に近づきたいという気持ちと、自分の苦悩に気付いてほしいという気持ちから、母が通う精神科を受診したが、「何を困ってるの?」と聞かれ、門前払いされたように感じた。

あの時、母の病気について詳しく教えてくれる人がいたら、もっと愛情を持って母に接することができたかもしれない。母のように、家族の中で一人死んでいくことがないように——精神科医になることを決めた氏を突き動かす祈りは今も変わらない。

入局後、当時の東大精神科が発達障害児療育に力を入れていたこともあり、子どもの診療に興味をもつ。同時に、のびのびと楽しく自閉症児と暮らす家族を見るにつれ、過度な社会適応を目指す療育に疑問を持ち始めた。氏は現在に至るまで一貫して、少数派を社会適応させる前に、多数派や支援者自身が、自分はどうなのかと反省することが重要であると主張してきた。

現在氏は、本学保健センターで精神科診療をしている。学生が訴える「眠れない」「気分が晴れない」などの症状の多くは、キャンパスの競争文化に関係しており、試験前に受診者は増える。学業で抜きん出ないという東大の評価系に乗れず、居場所を失い追い詰められる学生もいる。SNSに溢れる情報で他者と自分を比較し、焦る学生も少なくない。多様性を謳う東大は、もっと多様な評価系を提示し、学生たちに色々な道があることを伝えるべき、という氏の指摘は重い。

自殺を回避するには希望が必要——現在の氏がたどり着いた答えだ。道を外れたかに見えても、大丈夫。人生に多様な航路を与える価値のダイバーシティは、学生の命を救う。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

## バリアフリー最前線!



熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場⑩



## スピードを速めたキャンパスが置き去りにするもの

小さい頃から忘れ物が多く、よく怒られていた。そんな川瀬氏を母親は「私の子だから」とおおらかに育てた。一方で、小学生の頃から人と話をすることが大好きで、保健室で消毒してあげるなど人の世話を焼くことも好きだった。

相談支援研究開発センター  
川瀬英理 助教の巻



人に接する仕事をしたいと10年ほど看護師として勤務、その後「患者さんとより深い関わりを持ちたい」と臨床心理学の大学院に入った。卒業後は心理士として各地で勤務。10年前に、発達障害傾向のある学生を支援するコミュニケーションサポートルーム(CSR)が本学に立ち上げられた際、自身の発達障害傾向を自覚していた氏は興味を持ち、そこで心理士として勤務してきた。

CSRでは、発達障害をカテゴリではなくスペクトラムで捉えている。つまり診断の有無にこだわらず、大学に入ると周囲からの要求水準が高まるコミュニケーションやスケジュール管理などの領域で苦勞を抱える学生の相談にのり、ToDoリストを一緒に作ったり、心理検査をしたり、保健センターへの紹介や教員への配慮要請をしたりする。面接試験の相談など、就職活動まで伴走することもある。オンライン授業と事前資料配布が主流となり、社交不安症や板書に苦手さをもつ学生にとって授業は楽になる一方、プレッシャーが少なくて集中しにくくなるADHD傾向の学生もいるという。

発達障害という概念が人口に膾炙するようになり、一番多い主訴は具体的な苦勞ではなく、「自分が発達障害か調べてほしい」というものになった。その背景には、「学生に何を期待するか」という要求水準の変化があるだろう。氏は、保健センターの知能検査に関する調査を参照しつつ、タスクをこなすスピードの速さがかつて以上に求められるようになったことが一因ではないかとみる。特に教育経験豊富な教員に比べ、若くて優秀だが教育経験は少ない教員の場合、悪気はなくても学生の気持ちを想像しにくいこともある。教員同士のスーパービジョン体制は重要だ。

素早く業績を出せる学生だけではなく、時間はかかるが粘り強く自分のペースで学ぶ学生が認められる環境が必要——そう語る川瀬氏の実践から、発達障害への注目が高まる現代が何を失ってしまったのかについて学ぶべき点は多い。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

## バリアフリー最前線!



熊谷晋一郎室長が  
取材原稿で伝える  
障害研究の現場①



## 周縁から“普通”を問う

シェイクスピア作品を紹介するテレビ番組に魅了された子ども時代の清水氏は、やがて文庫でもシェイクスピアを読むようになる。また中高一貫の女子校時代に食べ吐きを経験したことで、欲望や身体のままならなさを知ったという。東大に入学すると、キャンパスのあちこちで「東大女子は見た目が悪い」等の会話が繰り返られていた。氏は、こうした日常的な違和感からフェミニズムに関心をもつようになった。

シェイクスピア研究をしようと文学部英文科に進学。少年俳優のみの時代にどうジェンダーが演じられたか、同性愛や異性装のキャラクターが観客にどう受容されたかなど、英語圏で盛んにフェミニズム批評やクィア批評が行われはじめた時期だった。英国留学を経て、シェイクスピア研究からフェミニズム理論・クィア理論へと研究の軸足を移す。

女らしく振舞え、異性を欲望せよ、生下時に割り当てられた性別を受容せよ——身体の感じ方や使い方、性や欲望の在り方について、私たちは様々な規範に縛られている。フェミニズム理論・クィア理論は、規範から排除される人々を対象化せず、周縁化された当事者の立場から“普通”を逆照射するアプローチである。

氏が危惧するのは、中絶・避妊の権利、同性婚などLGBTの権利、ジェンダー教育・研究などに反対する、Anti-Gender Movement (以下、AGM) である。北京女性会議に反発したカトリックにルーツを持ち、経済格差に苦しむ多数派の不満を燃料に、宗教右派や右派ポピュリズムを巻き込み大きな潮流となったAGMでは、性・ジェンダー・家族などのトピックが立場を超えた接着剤として機能し、女性や少数派の権利を擁護するグローバルエリートが自分たちの慎ましい家族観を脅かしていると批判する。

AGM同様、自らの価値観や慣行を不問に付し、そこを統合的な効果を示さなければダイバーシティやインクルージョン (以下、D&I) を主張しにくい雰囲気は大学にも存在する。しかし氏は「多数派が居心地のよさを手離すことなしに、D&Iは実現しない」と述べる。エリートと少数派を標的とするAGMが吹き荒れる中、大学は率先して自らの“普通”を問い直す必要がある。

## バリアフリー最前線!

バリアフリー支援室特任助教

中津真美



## オンラインで情報を保障すること

視覚障害学生・聴覚障害学生への支援

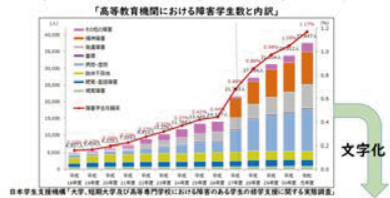
昨年度からオンライン授業が始まり、「視覚障害や聴覚障害の学生にも、遠隔で情報を伝える」という新たな支援が開始されました。ただでさえ情報弱者といわれる学生たちへの支援です。様々なICT技術を駆使しますが、限界を感じることもあります。ですが、配付資料の工夫や事前共有、話し方の工夫などがあるだけで、授業の理解度が格段に上がると学生たちは言います。

例えば教員が、配付資料の図表を文章にもすることで、視覚障害学生は音声読み上げソフトを使用して図表の内容を耳で聞くことができます。対面授業のように、誰かが隣で図表の内容を説明する支援はできませんが、図表の文字情報などを事前に学生に共有しておくことで、学生は安心してオンライン授業を受講できるようです。さらに、授業中も、指示語は具体的な説明に置き換え、明瞭な話し方がなされることにより、学生サポートスタッフも活動がしやすくなったと言います。聴覚障害学生への遠隔PCテイクを担う学生サポートスタッフからは、「適度な速度や一定の間がある話し方の授業は、余裕を持って入力できた」「授業の情報を概ね損失なく聴覚障害学生へ伝えられた」とのコメントが寄せられました。

先生方のコメントも心に残ります。「私どもとしては、支援をしている意識はなく、当然のこととして『丁寧にできる説明は、できるだけ丁寧に』という原則を貫いているだけです」

オンライン授業では、周囲の少しの配慮があれば、より障害のある学生の機会の平等に繋がることが分かってきました。「障害」とは、多数派と少数派の間のミスマッチにより発生するものとするれば、少数派だけが頑張るような文化は、もう終わりを迎えるのかもしれません。

図(グラフ)の文字(テキスト)化の例



高等教育機関の障害学生数と障害の種類ごとの内訳の推移を示す複合グラフ。障害学生数と内訳を積み上げ棒グラフで示し、障害学生在籍率を折れ線グラフで示す。横軸は年度、縦軸は左側縦軸が人数で0人から4万人まで5千人刻み、右側縦軸が障害学生在籍率で0.0から1.2%まで0.2%刻み。障害学生数は平成18年度の4,937人から令和元年度は37,647人に増加している。平成27年度からは、内訳に精神障害が含まれる。



## 発達障害・精神障害のある方の支援

大学などの高等教育機関における障害学生数は年々増加していますが、なかでも近年顕著に増加しているのが発達障害と精神障害です。東京大学も例外ではなく、バリアフリー支援室で支援している学生には発達障害や精神障害のある方が多くいます。もっとも、精神疾患の患者数は400万人を超えており、30人に1人は精神疾患を有していること、発達障害は生来的な特性でもあること、他の精神疾患も若くして発症することが多いことから、支援が届いていない発達障害や精神障害のある学生もまだ多くいるのではないかと思います。

発達障害や精神障害のある方にとって、支援を求めることは簡単なことではありません。疾患にもよりますが、自身の病状に気づくことに困難があったり、気づいてもコミュニケーションが苦手でうまく支援を求められなかったりすることが多いです。また、精神症状の多くは主観的な体験であり、周囲の人にとっては理解しづらく、誤解や偏見を生みやすいです。そのため周囲に精神疾患を知られることに不安があったり、自分自身で精神疾患を受け入れることに困難を感じたりすることも多いです。こうした方々に支援を届けるには困難に気づく周囲の目が必要になります。昨今はコロナ禍でオンライン授業が一般的になりました。発達障害や精神障害のある学生にとってオンライン授業は負担が少なく参加しやすいという方もいる一方で、オンライン授業では参加に困難を感じる学生もいます。後者の中には困っているのに支援を求められない方もいると思われそうですが、周囲の目が届きにくい状況であるため心配な点です。

うまく支援につながる事ができたら、授業や試験に際して合理的配慮を調整します。合理的配慮であるためには教育の本質を変更しないことが求められます。しかし、発達障害や精神障害では認知やコミュニケーションなどの能力に制限があることが多く、支援が教育の本質を変更するか否かの判断は難しいことが多いです。こうした判断はバリアフリー支援室だけでは困難であり、教員の先生方のご協力が欠かせません。

以上示してきましたように、発達障害や精神障害のある学生は増加しており、支援の必要性は増しているのですが、具体的な支援についてはまだ発展途上にあります。学生に関わる多くの教職員の方々の協力を得ながら、発達障害や精神障害のある学生にとってもバリアフリーな東京大学の実現に向かっていきたいと考えています。



## ボーダーレスな支援ツール

支援機器と聞くと、パラアスリートが使うような特注品をイメージされるかもしれませんが、一般に使われているものの中にも、障害のある人を支援するツールとして有用なものがああります。代表例は、iPhoneやiPadなどのスマートフォンやタブレットです。ピンチイン・アウト操作による拡大縮小表示・拡大鏡（デバイスのカメラを使用）・音声読み上げ（VoiceOver等）といった機能が標準で備わっています。

これらには、音声を認識して文字表示する音声認識アプリ（UDトーク等）や、手書きを遠隔共有するアプリ（MetaMoji Share等）、様々な色覚特性を持つ人の見え方を体験するアプリ（色のシミュレータ）など支援に活用できるアプリが多数あります。例えばスマホを使って、メールを音声読み上げ機能で読み上げる、写真や図等を指で拡大縮小、カメラを拡大鏡として使う、マスクで表情や口形が読み取りにくい場面で音声認識をさせるなどができます。そのため、障害のある人にとっては気軽に使える支援機器として、生活に欠かせない「インフラ」になってきています。スマホの音声読み上げアプリを駆使して、UTASの情報閲覧やITC-LMSでの履修手続きを行っている視覚障害学生もいます。聴覚障害のある私もスマホを肌身離さず携帯しており、職場やオンライン会議の発言を音声認識させています。

これらの機能は障害のある人だけではなく、障害のない人にとっても「使える」ものです。例えば、ICレコーダーの代わりに音声認識アプリを使って口述筆記や会議の議事録作成を行ったり、外国人との会話を翻訳させたりと、支援に限らず自由な使い方がああります。

また、WordやPowerPoint等のOffice系ソフトやGoogleドキュメント等も、近年は音声入力や音声認識（字幕表示）といったアクセシビリティ機能が追加されてきています。簡単に試すことも可能なので、当室でも支援室紹介動画等を作る際には、PowerPointの字幕機能を活用しています。

このように、障害のある人にとって有用な技術や支援ツールは特別なものではなく、当たり前のものになり、障害者支援の垣根が低くなってきたと感じます。支援と聞いて決して身構える必要はありません。身近なものをぜひ活用してみてください。

音声認識画面（左）と色のシミュレータ画面（右）





## 障害を普遍化したCOVID-19

障害とはいったい何だろうか。一般には、平均とは異なる機能や形を持った身体の〈中〉に存在する特徴だと考えられているかもしれない。しかし「障害の社会モデル」の考え方が打ち出されて以降、障害は身体の〈外〉に発生する現象だと捉えられるようになった。これは、身体的な多数派にカスタマイズされた社会環境（建物・道具・制度・慣習・言語・価値観など）と、少数派の身体を持っている個人との間に生じるミスマッチを障害だと捉える考え方である。今日、この障害の社会モデルは、障害者権利条約や障害に関する国内法の標準的な考え方になっている。

この考え方によれば、身体が多数派であっても、環境が変われば障害が発生することになる。Ebuenyiらは、COVID-19による社会環境の急激な変化は、障害という現象の普遍化を引き起こしているとして述べている。例えば、孤立し、地域とのつながりができないことは、施設に隔離された障害のある人々の経験と重なる。またCOVID-19に関する信頼できる情報にアクセスすることが容易ではないことは、視覚障害や聴覚障害のある人々が、情報保障が十分に提供されていない経験を想像させるものである。加えて、COVID-19に関連性が強いと誤解されることで、国籍や年齢、職業などを理由とする不当な差別をされる可能性が高まっているが、これも障害者差別と地続きなものであり、特に、医療サービスを受ける人に優先順位がつけられ、健康状態に基づいて個人に「価値」が付けられ、優先順位の低い患者はサービスが延期されたり、中断されたりする可能性が高まっている。さらに、障害のある人だけでなく、教育、労働からの排除は普遍化しつつある。このように、障害が普遍化する中、以前は障害者向けのソリューションとされてきたものが、今や汎用され始めてもいる。

しかし、障害の増大は均等に起きているのではなく、子どもや狭義の障害者、差別にさらされてきたグループや社会的状況の低いグループは、そうでない人々よりも、より一層深刻な状況に陥り、格差が拡大している。筆者もまた、安全性を確保しながら介助者を確保することに困難が生じ、一部の介助者に過度な負担をかけてしまっている現状がある。また、先日急性胆嚢炎で入院した際にも、入院中の介助者の付き添いが認められず苦勞をした。

漸弱性の高いグループがどこにいるのかをモニターし続け、有限な資源をそこに投じていくことは、このパンデミックを収束に向かわせるうえで不可欠な分配原理といえよう。



## 障害のある教職員との意見交換会

支援者との一対一の面談では、なかなか自分のニーズに気づき、それを表明することが難しいものだ。不便さに慣れてしまいニーズが潜在化することを「適応的選好」と呼ぶこともあるが、そこから抜け出すには、置かれた状況を互いに共有し、生き延び方を探求しあえるような仲間が必要だといえる。自分と同じ障害や、異なる障害のある他者の意見を聞くことではじめて、「そういえば、自分もそこに困っていた」と気付けることは少なくない。また、当事者の声を、役員や管理職に直接届ける機会もまれである。そうした対話の場として、バリアフリー支援室では毎年1回、障害のある教職員との意見交換会を開催してきた。

今年の意見交換会は、11月4日に開催された。障害のある構成員といっても多様であり、状況もニーズも異なる。毎年、どのようなグループ編成にすべきか、参加者の意見を反映させながら試行錯誤を続けているが、今年は、障害の種別ごとのグループで行った。

コロナ禍におけるコミュニケーションの希薄化や、勤務状況の把握困難、リモートワーク体制の整備など、昨年も聞かれた課題は今も続いている。しかしこの一年間、シフトの工夫やSNSの活用などによって、徐々にではあるが改善しつつある。

また、障害のある職員への支援や、途中で障害を負った構成員の支援については、これから取り組むべき大きな課題として今年も再認識されたが、UTokyo Compassに明示的にこれらの課題が書き込まれたこともあり、インクルーシブなキャンパスの実現に向けて障害のある教職員の視点と知恵が発揮される職域開拓の重要性が確認できたことは大きかった。

今年もまた、多くの宿題をもらった意見交換会だった。この声を羅針盤にして、バリアフリーへの取り組みを進めていきたい。



対面とオンラインを組み合わせ合わせたハイブリッド形式で行われた今年の意見交換会

# バリアフリー支援室所在地・連絡先

## 【本郷支所】 (本郷キャンパス)



学生支援センターモール階（御殿下記念館北側）  
電話：03-5841-1715  
FAX：03-5841-1717

## 【駒場支所】 (駒場Ⅰキャンパス)



教養学部8号館111号室  
電話：03-5465-8944  
FAX：03-5465-8952



## 【本郷支所柏分室】 (柏地区キャンパス)

※毎週火曜日開室

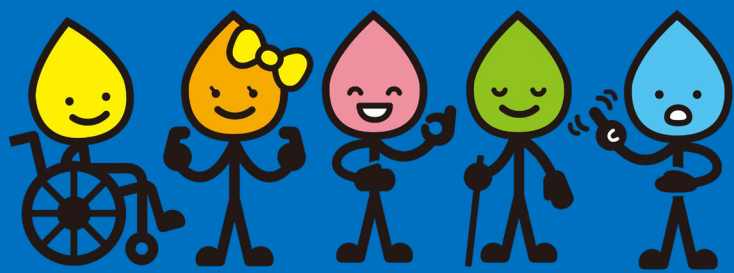
新領域基盤棟2階2B5号室  
電話：04-7136-5574



東京大学バリアフリー支援室URL <http://ds.adm.u-tokyo.ac.jp/>

E-mail [spds-staff.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp](mailto:spds-staff.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp)





東京大学バリアフリー支援室 キャラクター  
「ことだま〜ず」